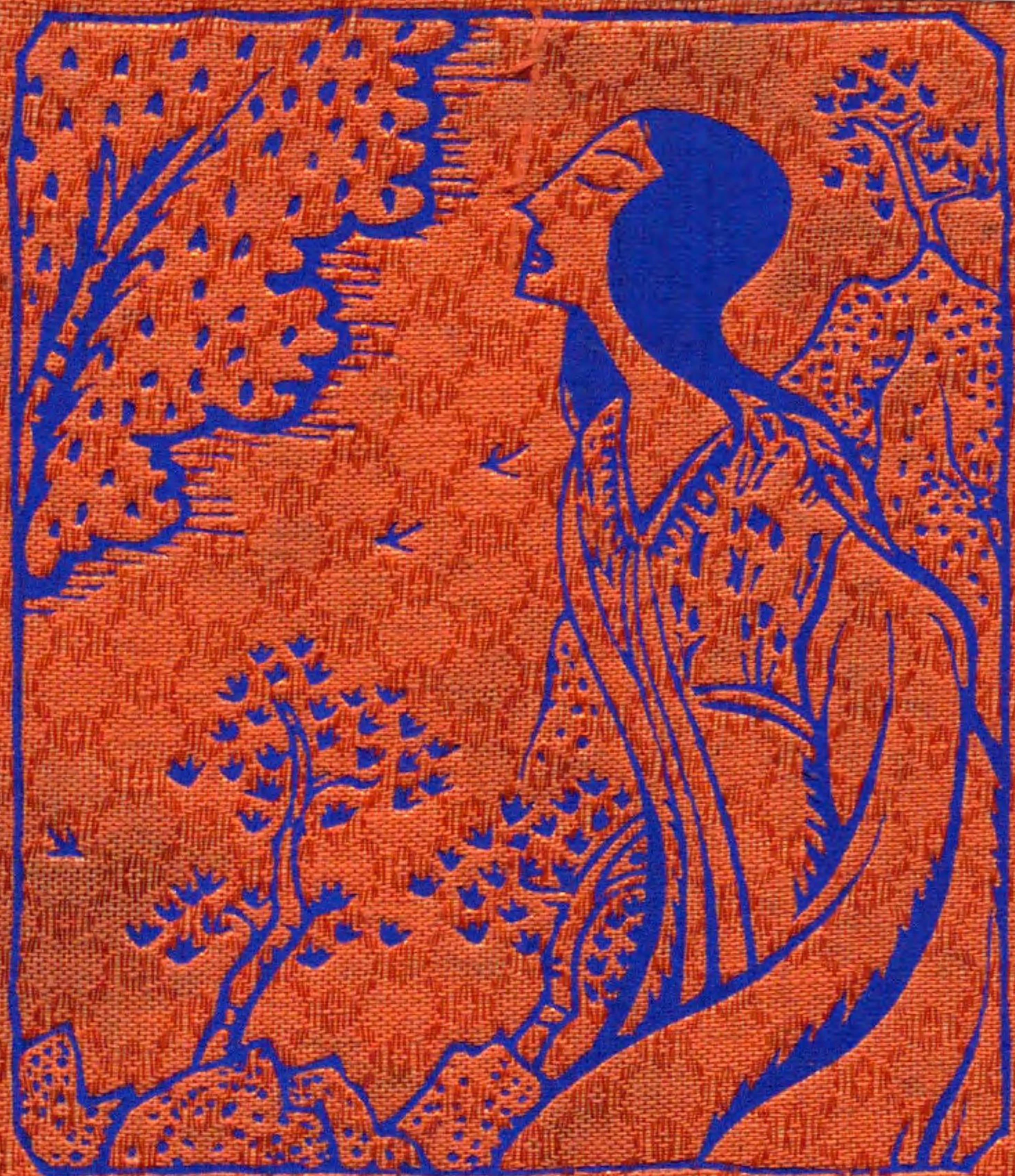


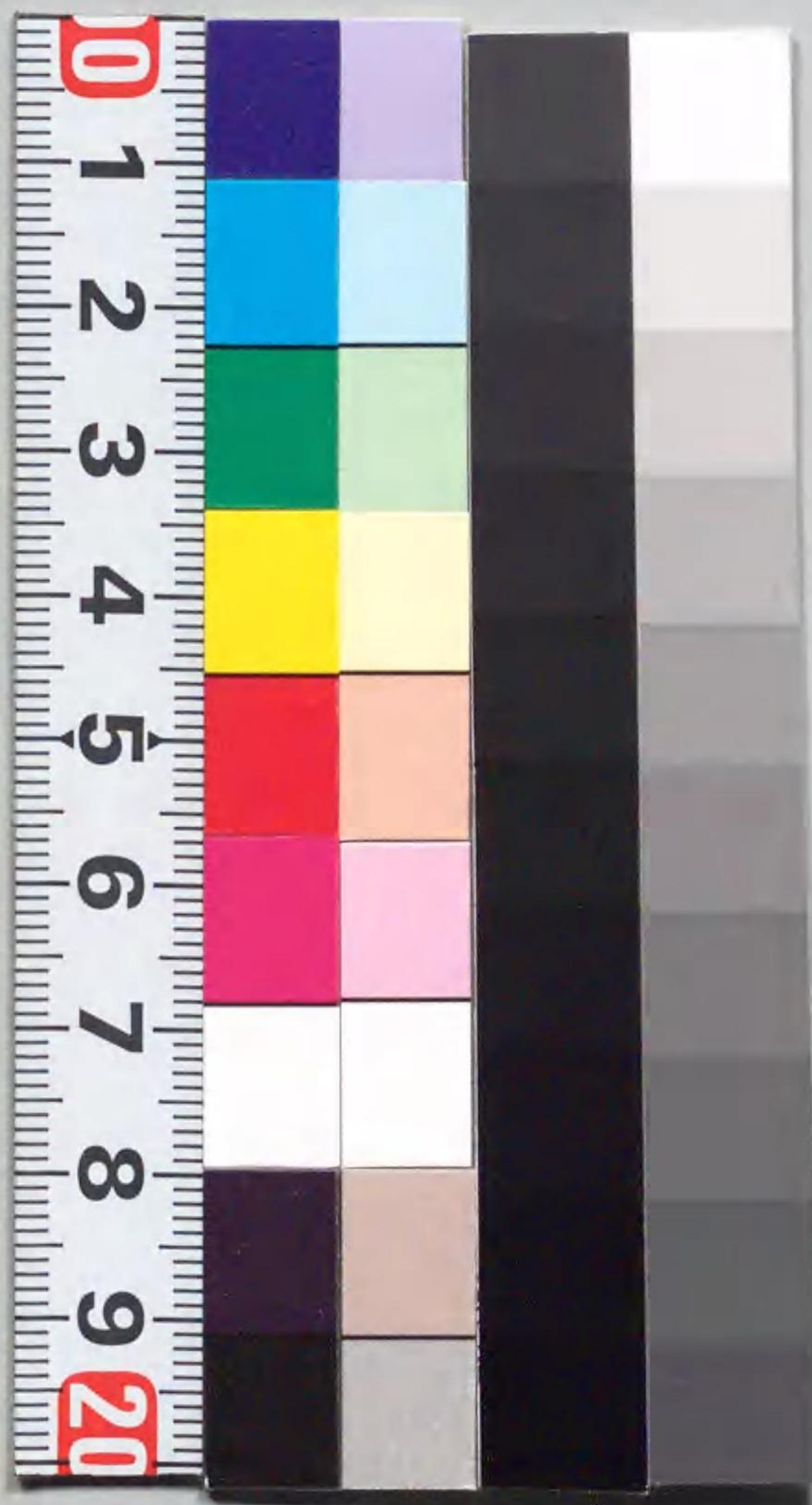
KH741-J1



1200901135518



近現代藝術社





吉井勇著

あかつきの鐘

近代文藝社

吉井勇著

あかつきの鐘

近代文藝社

KH741-J1



I 種
W



1200901135518

作創 あかつきの鐘 目次

▽愛の福音……………	一
▽大川真吉……………	三
▽東京へ、東京へ……………	四
▽鳩の家……………	空
▽傷ける鳩……………	八
▽孔雀夫人……………	一〇一
▽罪のさまよひ……………	一三
▽救ひの手……………	一四〇
▽戀の友情……………	一五三
▽お鳥の行方……………	一八〇

編 序
途の上の一挿話

目 次 終

次 目

▽黄 金 魔	101
▽大 雪 の 夜	111
▽正 義 の 爲 に	114
▽地 を 戀 ふ 心	115
▽春 の 海	116
▽地 獄 の 火	117
▽能 島 の 手 紙	117
▽鐘 が 鳴 る	118

愛の福音

鐘 鳴

一

能島辰雄は、處女講演が兎に角無事に終つたので、上氣して少し紅くなつた顔の汗を拭ひながら、伏目勝ちに壇を降つて往つた。

能島の演題は「杜翁の無抵抗主義」と云ふので、かなり自分にも興味のある問題だつたから、最初の五分間程の間が、ちよつと不安に感じられただけで、後はもう思ひの外流暢に、終ひにはやゝ芝居氣を出し過ぎた程情熱的に話をする事が出来たのだつた。殊にトルストイがその無抵抗主義の心境を具體化した小説「長い追放」の梗概を語る時までは、自分から先づその美しい物語に酔つてしまつた程感激して、涙が臉を浸しさうにさへなつ

た。

それで能島は割れるばかりの拍手の聲に送られて壇を降りると、丁度演壇の背後に當つてゐる講師室の扉を勢よく開けるなり、拍手の音を聴いて椅子から立ち上がらうとしてゐる江南北星に向つて、やゝ興奮した調子で聲を懸けた。

「おい、如何だつたい。聴いてゐて呉れたかい。」

さうすると象徴派の詩人として知られてゐる江南は、ちらつと目金越しに笑ひ懸けるやうな瞳を見せて、

「うん、聴いてゐたよ。しかしあんまり處女講演らしくないので、おしまひの方は失敬してしまつた。」と云つてから、急に氣が付いたやうに卓子の上に置いてあつた厚い詩集らしい佛蘭西語の本を取り上げて、

「さあ、今度は僕の番だ。」

と呟くやうに云ひながら出て往つてしまつた。直ぐに拍手の音は扉越しに嵐のやうにこ

つちの部屋に聴こえて来た。

一體この講演會は、最初は單に關門文學會と云ふ、年の若い文學愛好者の小さな團體に依つて企てられたものだつたが、それが動機となつて博多、熊本、長崎など云ふ九州地方の樞要な都會や、その外中國筋でも岡山とか廣島とか云ふやうな大きな市からも交渉があつて、意外に長途な講演旅行をしなければならぬことになつた。道程の順序から往けば、下の關は丁度半途にあるところだつたけれども、最初にこの計畫をしたと云ふことから優先權を與へられたために、第一回の講演會は、この公會堂で開かれることになつたのだつた。それだから能島達講演者の一行——今能島と言葉を取り交はした象徴派の詩人江南北星、それから新しい思想家として知られてゐる宮島孤萍、その外一行中の愛嬌者としては、その頃或る戀愛事件に依つて、文壇的と云ふよりもむしろ世間的に名を知られてゐる小説家の柳澤潔——かう云つた連中も、こゝではかなり深い興味と、かなり強い感激とを以て、講演をすることが出来たのだつた。殊に能島は今夜が處女講演であるだけに、

他の人達よりも一層烈しい興奮を感じた。

しかし能島は江南の何となく冷たい言葉に出會ふと、直ぐにまた講演をする前の不安が思ひ出されて、ちよつと暗いやうな心持になつたが、それでもやつぱりその卓子を取り圍んでゐる、宮島や柳澤の顔を見ると、もう一度江南に云つたのと同じやうに、

「如何だつたい。」

と云ふ言葉を懸けないではゐられなかつた。

宮島も柳澤ももう講演を済ましてしまつたので、ひどく暢々したやうな心持になつて、主催者側の青年達を相手に、何か饒舌つてゐるところだつたが、かう訊かれると始めて氣が付いたやうに能島の方を向いた。そして柳澤が先づその色の白い顔に笑を湛へながら言つた。

「如何したいどころか、一人で喋つて往つてしまつたぢやないか。何しろ今日は聴衆に女が多いから、君のやうにいつも愛の福音ばかり説いてゐる奴が受けるんだよ。」

「笑談云つちやいけない。いつも愛の福音を説いてゐるのは僕ばかりぢやあないぜ。君なんかは愛の福音の實行者ぢやあないか。」

能島がさう云ふと、柳澤はちよつと顔を染めて、

「ははははは、つまらないところで素つ破抜くなよ。ここには今日初対面の若い人達もいらつしやるんだぜ。」と云つてから急に眞顔になつて話頭を轉じた。「しかし何だね、ほんとに馬鹿に女が多いぢやないか。半分は女だぜ。」

「うん……。やつぱり時勢だね。」

新しい思想家の宮島は、さう云つてからちよつと皮肉な微笑を洩らしながら附け加へた。

「僕もこんなに女の聴衆が多いと知つたら『叛逆の心理』なんて演題を選ばずに、もつと御婦人連の氣に入るやうな『女性の自由』と云つたやうな演題でやりやあ好かつたと思ふよ。」

こつちでこんな話をしてゐる間に、演壇の上では、江南の講演が時々聴衆の胸に感激を

與へると見えて、その度毎に烈しい拍手の音がこつちの部屋までも響いて來た……。

二

江南の講演はかなり長かつた。演壇に登つてからもう一時間あまりになるのに、まだ中々終りさうな氣勢も見えないので、講演を濟ましてしまつた連中は、もうすつかり倦怠を感じて、話をする元氣もなくなつてしまつてゐた。

その公會堂は、かなり高い丘の上に建てられてゐて、風通しの好いところだつたけれども、八月の中旬の夏の盛りのことでもあるし、生憎その夜は風がなかつたので、旅疲れのしてゐる體には、一層酷く暑さが徹へた。唯僅かに窓から下に眺められる、關門海峽を通ひ過ぎる船の青い色や紅い色をした船燈の灯が、涼しさうに見えるだけであつた。

「おい、如何したんだい。江南のやつ、ひどく長講に亘るぢやないか。」

柳澤が耐へかねたやうにかう云ふと、宮島もそれに應じて云つた。

「うん、先生何だか講演の準備だと云つて、図書館へ出懸けたり何かして、ひどく勉強をしてゐるから、ここで大に日頃の蘊蓄を傾けてゐるんだらうよ。」

能島は二人の話し合つてゐるこんな言葉が、耳に入つては來るけれども、如何してもそこに口を挿む氣になれない程、氣疲れを感じてゐると同時に、ひとつの仄かなもの思ひのために惱されてゐた……。

そのもの思ひの種となつてゐるのは、ひとつの美しい幻影だつた。窓際の椅子に腰を下ろして、海峡を越えて向ふに見える門司の夜の灯を眺めてゐる能島の目には、その美しい幻影が何時までも何時までも映つてゐて中々消えさうにも見えなかつた。それはさつき演壇の上から聴衆の方を見渡した時に、ちらつと彼の目に映つた、愛くるしい黒い瞳を持つた白い顔で、演壇の上に立つてゐる間、ともすると彼の目はその瞳の方へ惹き付けられた。婦人席の一番端の方につゝ、まじやかに腰を懸けて、時々手帳を出して何か書き留めてゐる様子までが、今でも彼の目に鮮やかに残つてゐて、彼のちつと凝視してゐる幻影の

中にも、そつくりそのまゝ浮んで來た。年はちよつと見たところ十六七位にしか思はれなかつたが、それでゐてその顔にも體にも、もう完成した女らしい美しさが具つてゐた。

と、かうしてその幻影を凝視してゐるうちに、不圖能島の心に思ひ出されたのは、二三年前からよく彼のところに手紙を寄越す女がこの下の關にゐると云ふことだつた。それは

「森優梨子」と云ふ名前の女で、最初は彼のところにその翻譯したダメンチオの「死の勝利」を讀んだと云つて、それに就ての感想を書いて寄越したのだが、その後も彼が何か本を出す度に、きつとかなり長い手紙を送つて寄越した。その中にはかう云ふ文學好きの若い女性にありがちな、ひどく感傷的な文句が書いてあるかと思ふと、また時に依ると思ひ切つて理性的な鋭い批判に、頭の好さを示して來ることもあつた。兎に角能島に取つて「森優梨子」と云ふ名前は、確かにひとつの忘れられない名前となつてゐたのだつたら、今までその名前を思ひ出さなかつたのが、彼自身にも不思議に思はれた位だつた。

「さうだ。ひよつとするとあれがその女かも知れない。」

能島はさう心の中で呟きながら、やつぱりぢつと窓から外の夜景を見てゐるやうな様子をして、さつきからの仄かなもの思ひをつゞけてゐるが、そのうち急に扉の向ふの會場の方から、嵐のやうな拍手の音が聴こえたかと思ふと、やつと長い講演を終つた江南が、額に振り照かる髪を右の手で掻き上げながら扉を開けて入つて來た。

「やあ、如何も御苦勞様。」

柳澤は江南に向つて愛嬌よくこんなことを云つてゐるが、江南は相變らず詩人らしく取り濟ました態度で、

「兎に角、如何も講演と云ふものは、感興の産物ぢやあないやうだね。」

と云つて、さつきとそこにあつた麥藁帽子を取り上げて歸り支度を始めた。

能島の凝視めてゐた美しい幻影も江南について、どやくと入り込んで來た主催者側の青年達の蹙音や何かのために掻き消されてしまつたが、それでも「森優梨子」と云ふ名前を思ひ出したと云ふことだけでも、何となく胸のうちに仄かな温かみを感じられた。多

分——と云ふよりも必ず今夜の聴衆の中に交つてゐるに違ひないと思ふと、何となく會ひに來るのが待たれるやうな氣がしたが、しかし會場から出て往く聴衆の蹙音ばかり聴こえて、こつちへ入つて來るものは、主催者側の青年達の外には誰もなかつた。

「さあ、そろそろ出懸けやうぢやないか。」

さう云ふ柳澤の聲に促されて、能島はやつと椅子から立ち上がったが、折角心待ちにしてゐたものが現はれなかつたことは、かなり彼を失望させた。それで彼は自棄にステッキを揮り廻しながらみんなより先きに玄關を出て、町の方へ降りる石段の上のところまで來たが、不圖石段を降りやうとして傍を見ると、丁度四五間ばかり離れたところにさつき演壇の上から見た黒い瞳の持主が、人待ち顔に立つてゐるのを夜目ながらはつきりと認めた。

三

月のない暗い夜ではあつたけれども、公會堂の窓から洩れる電燈の明りで、彼の女の

つてゐる邊は、顔の輪廓がほんやり見える位の明るさがあつた。

能島が彼の女の姿を認めて立ち留まると同時に、女の方でも彼の姿を見付けたと見えて、駈け寄るやうに足早に彼の傍に近付いて来て、やや云ひ淀むやうに、

「あの能島先生でいらつしやいますか。」

と訊いた。

「ええ、能島ですが……。」

能島はさう訊かれると少しどぎまぎしてかう答へたきり黙つてゐると、彼の女は夜目にも著しくにつこり笑つて云つた。

「如何もこんなところでお待ちしてゐるなんて失禮だとは存じましたが、何だかわたくし一人で先生方のいらつしやるところに入つて往くことが出来なかつたものですから……あのう……わたくしはよく手紙を差し上げた森でございますの。」

「ああ、さうですか。いつも御手紙を有難う。」

「いいえ、もういつも勝手なことばかり申上げて……。」

こんなことを云つてゐるところへ、大勢どやどや一塊りになつて玄関を出て來たので、彼の女は急に遠慮するやうに、

「それぢやあ先生、いづれまた明朝でもお宿へ伺ひますわ。お宿は常吉なんでございませう。」

と云つて、彼が返事をするのも待たないで、急いで身を翻へすやうにして、一足先きに石段を降りて往つてしまつた。

能島はみんなが來るのを待ち合はせて、かなり高い石段を降りて往つたが、今ちよつとさつき見た黒い瞳の持主に言葉を取り交はしたと云ふだけで、ひどく幸福な心持ちにされてしまつてゐた。それにその黒い瞳の持主が彼の書いたものの愛讀者で、屢彼のところへ手紙を寄越した女であると云ふことも、彼の幸福感を一層強めずには措かなかつた。彼は美しい幻影の後を趁ふやうにしながら、高い石段を降つて往つた。

と、丁度石段を降りきつて、これから町へ出やうとするところまで来た時だった。能島の耳には不圖柳澤と江南とが話し合つてゐる聲が耳に入った。

「何だね、今夜の聴衆の女の中に、ひどく帝劇の女優の奈良静江に似た女がゐるぢやあな
いか。」

さう云つてゐるのは柳澤だった。

「え、奈良静江に似てゐる女……。そんな女がゐるたかなあ。演壇の上に立つてゐると僕にはまるで女の顔なんぞ見えやしないよ。さすが戀愛小説家だけあつて、君は頗る目が早いなあ。」

江南はさう云つて微笑かに笑つた。

「いや、目が早いつて譯ぢやないよ。しかし美しいものを發見するのは藝術家の務めだからね。」

「はははは、飛んだ藝術家だ。まあ、せいぜい君の藝術に精進せいじんしたまへ。」

「精進してゐるさ。もうその女の名前まで聴いちまつたんだ。」

「呆おろれたやつだな。何て云ふ名だい。」

「うん……。まあ君だから教へてやらう。森優梨子つて云ふんだ。ゆは俳優の優の字で、梨りは木の實の梨と言ふ字を書くんだ。」

能島は何氣なく聴いてゐた二人の會話の中に、突然彼の女の名前が出て来たので、思はず胸をどきつとさせたが、しかしその女が自分の書いたもの愛讀者だと思ふと、何となく微笑ますにはゐられなかつた。

「明朝自分を訪れて來たら柳澤のやつどんな顔をするだらう。」

そんなことを考へるだけでも、能島の胸はときめくのだった。

町へ出ると、そこはもうかなり繁華な通りになつてゐて、夏の夜のことだから涼みがてら散歩をしてゐる人達で賑はつてゐた。雜誌屋の店頭には、美しい女の顔に月桂樹の葉をあしらつた今夜の講演會のビラが懸つてゐて、その前には三四人の人が立ち留どまつて何か

鐘 曉

の噂をしてゐるらしかつた。能島達は何となく行き會ふ人に顔を見られるやうな氣がして、いささか晴がましく感じながら河岸に臨んだ宿屋の方へ歩いて往つた。主催者側の青年達は何處かのカフェに寄ると云つて、途中で別れてしまつたので、宿屋に來たのは彼等の一行四人のものばかりだつた。

宿屋の玄關に入らうとする時、柳澤はちよつと人懐こい微笑を見せながら云つた。

「如何だい。これから少し酒でも飲んで、旅の苦勞を忘れやうぢやないか。兎に角講演の第一夜が大成功だつたんだから、いささか祝意を表しても好いと思ふよ。殊に能島君なんぞは處女講演なんだからなあ。」

四

そこは宿屋と料理屋とを兼ねた家だつたので、祝宴の用意は直ぐに出來た。最初はみんな長途の旅で疲れてゐたので、あんまり興も乗らないやうだつたけれども、少し酔つて來

るにつれて、座敷はだんだん面白くなつて往つた。が、能島は酒もあんまり飲めなかつたし、藝者と云ふものにも興味がなかつたので、一人で先きに別の部屋に寢床を取らして、そつと座敷を抜けて寢てしまつた。

しかし一人になつて見ると、能島も何となく旅愁と云つたやうな寂しさが感じられて、中々眠付くことが出來なかつた。直ぐ枕の下の石崖をひたひたと洗つてゐる潮の音も、夜が更けるにつれて高く耳についた。それにさつき暗の中で聽いた女の聲が、まだはつきりと耳に残つてゐて、ともすると演壇の上から心を惹かれた愛くるしい黒い瞳が、閉ぢてゐる目に映つて來た。そしてそれと同時にさつきちらと聽いた優梨子によく似てゐると云ふ帝劇の奈良靜江と云ふ女優のことが思ひ出された。

それは柳澤を文壇的よりもむしろ世間的に有名にしてしまつた戀の相手で、彼はその女優に失戀してから、その戀愛事件の顛末を具さに書いた、長編告白小説「落椿」が意外に世間の評判になつたために、一躍して文壇第一の寵兒となつてしまつたのだつた。それ以

途の上の一挿話

來彼はいつも失戀小説ばかり書いてゐるが、それがいつも批評家達に評判が好いので、彼はもう今では繰り返し繰り返し同じ事件の告白ばかりを書いてゐて、それ以外の材料には殆んど筆を着けなかつた。

そんなことがあるので、奈良靜江に似てゐる女を發見したと云ふことは、柳澤に取つてかなり重大なことに相違なかつたからこれからもきつと彼の女に對して、無關心であることは出來なからうと云ふことは、既にさつき話を聞いた時から能島の胸には想像された。そして彼の戀敵となることもがもう必然的な運命であると云ふことも覺悟してゐた。

さう思ふと、能島には明日の朝優梨子がこの宿屋に自分を訪ねて來た時のちよつと戯曲的な光景が想像されて、夜が明けるのが待ち遠しかつたが、さうなると一層目か冴えて眠られなかつた。それにみんなの騒いでゐる聲が座敷の方から聴こえて來るのも耳に觸つた。「ちえつ、何をしてゐるんだらう。うるさくつて眠られやしない。」

能島は床の中で舌打したうちをしたり寢返りを打つたりしてゐるが、そのうち旅の疲れが出たと

見えて、何時の間にかうとうとと寢込んでしまつた。

が、能島が酔つてゐる柳澤の手に依つて、荒々しく揺り起されたのは、それから一時間ばかり経つてからのことであつた。最初から、能島の寢た蚊帳かやの中には、もう一つ誰か寢るための寢床が敷いてあつたので、いづれ誰か來て寢ることは思つてゐるが、ここに柳澤が寢に來やうとは思はなかつた。殊に彼を揺り起すなり柳澤は、くどくどとこれまで幾度も聴き馴れたその失戀の悩みを訴へるので、何だか終ひには少し腹立たしくなつて來た……。

「さあ、もう遅いから寢たまへ。明日は小倉なんだぜ。」

「小倉なら君直ぐぢやあないか。まあ、そんなことを云はずに、僕の云ふことも聴いて呉れたまへ。」

柳澤は床の上で輾轉反側しながらこんなことを云つてゐるが、急に氣が付いたやうに話を變へて、

「ところがね、僕はもうこれからはあの女のことなんか忘れてしまふよ。僕は今夜僕等の講演を聴きに來てゐた女の中に、彼の女に代るべき美しき女性を見付けたんだ。」

と云つて、ちよつと楽しさうに目瞬きをしてゐるが、それが森優梨子のことであると云ふことは、能島にはむしろ分り過ぎる程分つてゐる。が、能島はまるで知らないやうな調子で疊みかけて訊いた。

「ふうん。そいつはうまくやつてゐるね。一體何者なんだい。名前はもう分つたのかい。」
さうすると、柳澤はちよつと探つたさうに笑つて、

「まあ、好いよ。僕の説いた愛の福音と、君の説いた愛の福音と、どつちが聴衆に強い影響を與へたかと云ふことが、もう直き分る時が來るだらうから……。」

と云つたが、間もなく深い歎息を吐いたかと思ふと、何時の間にかもう微かな鼾を立てて眠入つてゐた。

一旦柳澤のために目を覺まされてしまつた能島は、何だか急に目が冴えてしまつて、如

何してももう眠られなかつた。彼は隣りの寢床にいぎたなく眠つてゐる、柳澤の邪念のない寢顔を見ると、何となく濟まないやうな心持を感じさせられて、幾度か目に浮んで來る黒い瞳を振り拂はうとあせつた。

能島の懊惱は、雨戸の隙間から仄白い朝の光が流れ込んで來る頃までつゞいた……。

大川眞吉

昨夜寝たのが、もう曉あけつぎに近い時分だったので、みんなが目を覺さまして起きて來たのは、もう正午ひるを少し過ぎてゐるが、能島だけは翌朝訪ねて往くと云ふ優梨子の言葉が頭に残つてゐるせいか、とう／＼三時間ばかり浅い眠りに落ちたばかりで、九時頃になると目を覺ましてしまった。と、もう優梨子の美しい姿が目の前に見えるやうな氣がして、いぎたなく眠つてゐる柳澤を隣りの寢床に残したまま、そつと幅はたから抜け出して、直ぐ階下したの廣間の方へ降りて往つた。

まだ宿の者も起きないと見えて、閉めたままになつてゐる雨戸を、能島は二三枚繰つて

から、縁側に置いてある藤椅子に腰を下ろして、靜かな晴れた日の海峽の午前の風景を眺めてゐるが、さうしてゐると何となく旅を楽しんでゐるやうなんびりした心持になつて、昨夜あれ程彼を悩ました女のことだんだん彼の胸から薄らいでいつた。

能島の目には、向ふ岸のあまり高くない山の翠巒すいらんや、海峽を流れてゐる渦潮の深碧な色などは快く映つたが、昨夜あの公會堂の窓から見た美しい燈火に彩いろられてゐた眞向まむかひの街が、工場の煙突や倉庫の亞鉛屋根とたんを、眞晝の日の光の下に現はしてゐるのを見ると、最初は多少幻滅の寂しさを感じないではゐられなかつた。が、しかしちつと見てゐるうちには、そんなところにも、何處となく心を惹かれるものがあるのを知つた。殊に五六千噸もあらうかと思はれるやうな巨船が目の前を通るのを見たりすると、深い呼吸をした後のやうな活いき々した快さが感じられた。能島はちつと藤椅子に腰を下したまま、かなり長い間飽かずこの快い眺望を貪つてゐた。

が、かうしてゐる間も、能島は全く優梨子のことを忘れてゐると云ふ譯ではなかつた。

彼は女中が雨戸を開けに來たり、またそこらを取り片附けに來たりする度毎に、彼の女の訪れを知らせに來たのではないかと思つて、いつも胸をどぎどぎさせながら女中の方を振り向いた。しかし一時間経つても、二時間経つても、もう正午に近くなつても、彼女の訪れを知らせて來る何ものもなかつた。能島は何だか彼の女から體よく翻弄されてゐるやうな氣がして、焦燥しながら藤椅子から立ち上がつて、幾度か縁側を歩き廻つたりした。

そのうちやつと目を覺ましたものと見えて、江南が何處か酔の残つてゐるやうな白けた顔をしながら、眩しそうにその座敷へ入つて來た。

「やあ、お早う。」

「あんまりお早うでもないぜ。もう正午過ぎだよ。」

能島がかう云ふと、江南はその詩人らしい顔に人の好きさうな微笑を浮かべながら頭を掻いた。

「さうかい。そいつは驚いたな。」さう云つてから江南は不圖思ひ出したやうに云つた。「驚

いたつて云へば、昨夜の柳澤の酔ひ方にも驚いたよ。君はあれから大分惱ませられやしなかつたかい。」

「うん、惱まされたことは惱まされたが、それ程でもなかつたよ。」

能島はさう何氣なく云つたものゝ、若しここにあの森優梨子が現はれて、たとへ戀と云ふ程でもなくとも、二人の間にこれまでに多少の交渉があつたと云ふことが柳澤に知れると、當然敵意を持つた目で見られなければならないと云ふことを考へると、何となく胸が暗くなるやうな心持にならずにはゐられなかつた。

で、能島はそれつきり黙つて對岸の方を眺めてゐるが、暫時すると江南はまた何か思ひ出したやうに話し懸けた。

「あのね、昨夜柳澤はしきりに森優梨子と云ふ女の名前を云つてゐるが、ありやあ去年あたり君のところへよく手紙を寄越したあの女ぢやない。」

「ええ、手紙を……。」

能島は誰も知らないと思つてゐた秘密が、何時の間にかこの友達に知れてゐると思ふと、ちよつとどきまぎしながら顔を染めた。

「そんなこともあつたが、君は如何してそんなことを知つてゐるんだい。」

「實はね、僕のところにあの森つて女の友達の手紙を寄越して、こゝに君の非常な愛讀者があるよと云ふことを知らせて來たんだよ。」

「さうか。しかし唯愛讀者と云ふだけなんだぜ。」

「そりやあ分つてゐるよ、しかしこのことが柳澤に知れると、君はまたあの久留島のやうに一生敵役として小説に書かれなきやならんぞ。」

さう云つて江南は聲を立てて笑つた。久留島と云ふのは二流どころの青年戯曲家で、柳澤から奈良静江を奪つたために、いつも彼の小説では當の相手の戀敵として悪魔のやうに描かれてゐる男だつた。

二人がこんな話をしてゐるうちに、宮島も柳澤もやつと目を覺まして起きて來たのでこ

の座敷はまた急に賑やかになつた。柳澤は今日はもう昨夜のやうな元氣がなく、すつかり疲れてゐるやうな顔附をしてゐるが、それでも時々思ひ出したやうに優梨子の名を口にしていた。

朝とも晝ともつかないやうな飯を食つてゐるうちに、だんだん今夜講演會が開かれる筈の小倉へ出發する時刻が迫つて來たが、しかし優梨子の美しい姿は、到底能島達の目の前に現はれなかつた。能島は何となく裏切られたやうな寂しさを感ずると同時に、ほつと安心したやうな吐息を洩らさずにはゐられなかつた。

二

能島達の一行は、小倉の講演會を終るとその晩はそこに泊つて、翌日は朝早くから豫定の行程を追ふて福岡へ向つた。

小倉の講演會は、下の關の關門文學會よりも、もつと廣い意味の文化事業を目的として

ある青年文化會と云ふ團體の主催だつたから、聴衆の數も非常に多く、會場あに宛てられた女學校の講堂には入りきらないで、廊下まで人が溢れてゐた。能島はこゝでの演題を思ひ切つて「愛の福音」と附けたが、仲間の者からあんまり基督教の説教めいてゐると批難されたにも拘はらず、それがまた非常な成功で、他の人々が受けたのとあまりに違ひ過ぎる程の喝采を博した。が、それに引き代へて柳澤の講演は、彼が得意の文學の内容的價值を論じたものだつたのに、如何してだかその日は非常に出來が悪く、寂しい拍手に送られて壇を降つた。それだからその晩講演會が終つてから、主催者の催した歡迎會の席上でも、能島一人が花形役者のやうになつてしまつて、そこに集つた多くの青年は、みんな彼の周圍にばかり集つてゐた。それはひとり柳澤ばかりでなく、江南や宮島にまで、嫉妬に似た反感を起させた程、能島の講演は青年達の心を魅了みれうし盡くしてゐるのだつた。

そんな工合で、一行四人の心のうちには、何となく冷たいものが流れ始めてゐると云ふことが、能島にも微かに感じられてゐた。彼は自分の講演の意外な成功を喜ぶと同時にち

よつと仲間外れにされたやうな寂しさを感じないではゐられなかつた。が、汽車が小倉の停車場を離れる頃には、みんなはもうそんな反感や嫉妬は忘れたやうに、さう云つた人達らしい警句などを取り交はして、その長途の旅を愉快にすることはかりを考へてゐた。露に驟雨があつたので、明け放つた窓から吹き込んで來る雨上りの風も涼しかつた。

「ああ、もう講演も厭になつたなあ。まだこれから大變だぜ。」

柳澤がさも疲れたやうに窓枠に頭をもた寄せながらかう云ふと、いつもむつつりしてゐる宮島がちよつと笑ひながら云つた。

「しかし、まあ、安心しろよ、講演やの如しと云ふから、直きに濟んでしまふよ。」

さうすると直ぐに江南が冷やかすやうな調子で云つた。

「なんだ、光陰箭の如しつて洒落しやれかい。宮島にも似合はない洒落だなあ。」

そんな言葉を聽いてゐると、能島も何か警句めいたことを云ひたいやうな氣持になつたが、しかしさう云ふ言葉を口にしようと思ふと、昨夜から時々思ひ出したやうに感じられ

る寂しさが急に彼の胸に蘇^{よみがへ}つて来て、直ぐにその口を封じてしまった。黙つてゐると彼はよいよ寂しくなつた。

と、もうかなり博多に近くなつてからのことだつた。能島は東京を發つてからずっと睡眠不足がつづいてゐたので、何時の間にかうとうと微睡^{まぼろし}んでゐると、不圖彼の耳に夢の中の言葉のやうに聽えて來る聲があつた。

「君は兎に角、あんまり伶俐ぢやあないよ。君が奈良靜江に似てゐると云つて、ひどく憧憬してゐた女があつたらう。何とか云つたな……うん、森優梨子か……ありやあ君、能島のもの愛讀者なんだぜ。」

さう云つてゐるのは江南らしかつたが、すっかり睡魔に襲はれてゐる能島はやつぱり目を閉ぢたままうとうとしてゐた。

「さうか。そいつはちつとも知らなかつたよ。何かい。唯愛讀者と云ふだけなのかい。」
さう云ふ柳澤の聲には、明らかに嫉妬の情が含まれてゐた。

「さあ、そのところは僕には分らないよ。しかし二三年前から敬慕の手紙をちよくちよく能島のところに出してゐたと云ふことだけは確かなんだよ。」

「ふうん、さうか。」

「それに僕は、能島がひどくあの女が自分の愛讀者だと云ふことを匿^{かく}してゐるのがをかしいと思ふよ。そればかりぢやない。現に僕は變だなど思はれるやうなことを見たことがあるんだ。」

「何だい、それは、變だなど思はれるやうなことつて云ふのは。」

「それは何だよ。あの下の關の講演會の晩、歸りがけにあの石段の上のところ、二人が話してゐるのをちらと見たんだ。」

「なあんだ。そんなことがあつたのかい。僕はちつとも知らなかつた。」

さう云ふ聲の調子で、柳澤の悄然としてゐる顔附が見えるやうだつたが、しかしこの場合能島は目を覺ます譯にはいかなかつたので、やつぱり目を閉ぢたまゝ眠た振りをしてゐる

た。と、大きな笑聲がしたかと思ふと、今度は宮島らしい聲で嘲るやうに云ふのが聞こえた。「何しろそんなことをまるで知らないで惚れてゐるところが、柳澤の失戀小説家として名のある所以だよ。」

その言葉につれて、三人は一緒に聲を立て、笑つたが、能島の耳には、何故か柳澤の笑ひ聲だけが、ひどく寂しく恨めしげにひびいて來た……。

かうなると能島は、すっかり目を覺ます機會を失つてしまつて、やつぱり目を閉ぢたまゝとうとうと微睡んでゐる様な振りをしてゐたが、しかし昨夜から彼の胸に微かに感じられて來たこの講演旅行の前途に横はる不吉の豫覺は、だんだん深くなつてゆくばかりだつた。そのうち汽車は博多の停車場に着いた。

博多での講演會は、その大きな新聞社の主催だつたので、停車場には自動車が廻して

あつたりして、一行の者はこれまでにないやうな歡迎を受けた。それに講演會の日取りが新聞社の方の都合で、一日延ばしてその翌日の日曜の午後と云ふことになつてゐたので、能島達は久しぶりで一日をのんびりした心持で過ごすことが出来る譯だつた。

それで見んなは悠くり出来ること、思つて案内された宿屋に着くなり、浴衣に着換へて寛ろいであると、二三日前から新聞で廣告してゐるだけに、彼等は直ぐに訪客難に出會はなければならなかつた。

それでも最初はわざわざ訪ねて來て呉れたと云ふことに對して、好意を以て會ふことが出來たけれども、中にはいきなり短冊を出して揮毫を強いたり何かするものがあつたりして、すっかり不愉快にさせられたりすると、みんなもうそれ以上訪客難に堪へられなくなつた。中にも柳澤はいろいろのことからひどく焦燥した氣持にさせられてゐると見えて、暫時客が途絶えたと耐へきれないやうな調子で云つた。

「おい、堪らないよ。この貴重な時間をくだらない質問に答へたり、短冊に拙い字を書い

たりして費すのは、實に愚だよ。女中に吩咐いんぷつしてもう客を断つてしまはうぢやないか。」

と、そこは川の方に向いた座敷なので、さつきから一人黙つて水の面つらはかり眺めてゐた能島は、ちよつと柳澤の方を見送るなり嬌たしなめるやうに云つた。

「しかし、君、折角訪ねて来るものに對して、事實じじつもないものなら格別、ゐるのにゐないなんて云つて會はないと云ふ法はないよ。」

「さうか。それぢや君一人で會つたら好いぢやないか。君一人が人氣役者なんだから、君さへ會つてやれば、みんな満足して歸るだらうから……。」

その言葉には明らかに反感の念が籠こもつてゐると云ふことは分つてゐたが、しかし能島はそれに氣が付かないやうなさりけなない調子で云つた。

「そりや僕一人で會つたつて好いよ。何なら君達はこれから管崎はこざきの方へでも遊びに往つて來たら好いぢやないか。どうせ今日は講演會もないんだから……。」

「しかし、何だ。君一人に訪客難を引き受けさせるのは氣の毒だ。」

宮島がさう云ふのを柳澤は傍から打ち消すやうに、

「まの、好いぢやないか。能島がああ云ふんだから引き受けて貰つて、僕等は何處かへ出かけやうよ。如何だい、江南。一緒に往くだらう。」

「うん……。往つても好い。」

さつきから繪葉書に萬年筆を走らせてゐた江南は、振返りもしずに怖うさうにかう答へた。間もなくみんなは能島一人を残して外へ出懸けて行つた。

能島は一人になると、河の方に向つた縁側へ出て、ほんやり向ふ河岸を通る人影などを眺めてゐるが、水に映る日光の反射に二三度眩くらしさうに目瞬瞬きをしたかと思ふと、座敷の中へ入つて座布団を枕にしたまま横になつた。かうして一人になつて見るとまた寂しい孤獨感に襲はれないではゐられなかつた。

一體能島が今度の講演旅行に加はつたのには、彼自身としては他の人達のやうに、唯何か藝術に關する話をすると云ふことだけが目的ではなかつた。彼は元來最初から單に藝術

的慾望のために、詩を作つたり、小説を書いたり、戯曲を書いたりしてゐなかつたやうに、今度の講演ももつと深く彼の日頃から高唱してゐる人類愛の宣傳をするためであつた。それだから彼の講演には他の人達と違つて、直ちに人の心を動かすほどの熱があり力があつた。そしてその熱と力とが取りも直さず彼が一人で喝采を博し、人氣を一身に集めることが出来た所以だつた。

能島はかうして一人で自分の講演の成功した理由を考へて見ると、それが當然の結果であると思はれなかつたが、しかし處女講演として始めて演壇の上に立つた時のことを思ふと、さすがに頬が火照るやうな氣がした。自分で何を喋舌つてゐるか分らない程興奮してゐた時のことを思ひ出すと、何だか自分ながら耻しいやうな心持になつたが、そのうち不圖聴衆の中に交つてゐた優梨子の黒い瞳が目に浮んで來ると、今度は本當に胸がときめくのを感じた。

で、彼は無理にその美しい幻影を振り落すやうに、勢よく起き上がったが、丁度その時

一人の女中が入口の襖を開けて、

「あの、この方がお見えになりましたが……」

と云ひながら、一枚の名刺を持つて入つて來た。見るとその名刺は、畫學紙を名刺形に截つたもので、表面には墨で黒々と「大川真吉」と云ふ字が拙い筆蹟で書いてあつた。名刺を見ると能島には直ぐ労働者風の一人の男が想像された。

四

女中に案内されて入つて來た男を見ると、能島はそれが自分の想像してゐた通りの男だつたので、思はず微笑しながらその男を迎へた。

「さあ、どうぞこつちへお入んなさい。」

かなり汚れた油污染あぶらしみみのある青い色の職工服を着た、大川と云ふその男は、顔に似合はずひどく遠慮深い様子で、入口のところ立つてゐたが、かう云はれるとちよつと頭を下け

て、

「それでは失禮します。」と云つて座敷の中へ入つて來た。そして能島の方を向いて

「突然伺ひまして、御多忙のところを甚だ恐縮です。」と云つてから、そこに出してあつた座布團の上に窮屈さうに座つた。

能島はこつちへ來てからも、かう云ふ訪問者には今日始めて出會つたので、如何云ふ話題を選んで好いかちよつと困つて、暫時の間黙つてゐると、そのうちに大川と云ふ男の方から口を開いた。

「ええ、實は今日伺ひましたのは、ひとつ先生に私の書きましたものを見て頂きたいので……。」

「はあ……。で、そのあなたの書かれたものと云ふのは何なんです。小説ですか、戯曲ですか。」

能島はこの青い職工服を着た男の作品にかなり多くの興味を持ちながらかう云つて訊

いた。

「え、それは一幕物の戯曲なのですが……。如何でせう、見て頂けるでせうか。」

「ええ、そりやあ無論喜んで拜見しますよ。今そこにお持ちなんですか。」

「ええ、持つてゐます。」

大川はかうはつきりした調子で言つてから無造作に服の內衣兜うちがくしから新聞紙に包んだものを引つ張り出した。そしてちよつと羞耻はにかむやうに目を伏せながらその包を開いて、四十枚ばかりあるかと思はれる位の厚さのその一幕物の原稿を取り出して、徐しゆかに彼の前に置いた。

その戯曲は、何處かゴルキイの「夜の宿」に似通つたところのある、人間の暗い慘みめな生活を描いたもので、主要な人物としては哀れな職工やその妻子などが取り扱はれてゐるが、中にも能島の心を惹いたものは、宗教的信念から進んでさう云つたどん底生活の中に身を投じて、遂にそのために犠牲的の最期さいごを遂げる、一人の勇敢な青年の尊けく氣たしい心持であつた。

能島は前に置かれた戯曲の原稿を取り上げるなり、直ぐ「一人の死」と云ふ題からして氣に入つてしまつたで、彼はかなり緊張した心持で登場人物と云ふところから讀み始めて往つたが、それはずいぶん宛て字や何かがあつて、技巧的には拙いものだつたにも拘はらず、如何しても讀む者の心を擱まないでは措かないと云つたやうな、體驗から來てゐるらしい作品の力は、かなり強い氣魄を以て彼の胸に迫つて來た。

能島は夢中になつて讀みつづけた。大川も何となく心配になると見えて、能島の目の後を追ふやうにして、自分の原稿の上に目を落してゐた。重苦しいが何となく快い沈黙だつた。二人の耳には、唯原稿紙をまくる音ばかりが、思ひの外に高く聴こえた。

能島がまだ讀み終つたばかりで何とも云はないうちに、大川はその言葉を待ち兼ねたやうに突如として訊いた。

「如何でせう。ものになつてゐるでせうか。」

「ええ、ものになつてゐるどころか、非常に面白うござんしたよ。失禮ですがこれはあな

たの處女作なんですか。」

さう云はれると大川は少し頬を赧くして答へた。

「ええ、全くの處女作で、まことに御覽に入れるのもお耻しいやうなものなんですが……實は妹が小説のやうなものが好きで、何時ぞやも先生のところに手紙を差上げたなんてことを聴きましたもんですから、それで無理に先生に見て頂かうと思つて伺つたのです。」

「さうですか。で、あなたのお妹さんとおつしやると……。」

「ええ、森と云ふ家に養女に往つてをりますので、苗字は私と違ひますが、優梨子と云ふ不束者です。」

「ああ、あなたのお妹さんとおつしやるのはあの優梨子さんですか。」

能島は思はず目を見はつて、大川の顔をまじまじと凝視めた。

東京へ、東京へ

丁度大川がその處女作の脚本を持つて、能島を訪れたその日には、優梨子の家へは、彼女の女を中心としてゐる雑誌「紺青」の連中が集つて、彼女の女の上京を送る短歌の會を開いてゐた。

それは壇の浦の直ぐ海に臨んだところにあつて、請負師としてかなりこの地方に勢力があつた彼の女の養父が、歐洲戦役の好景氣時代に、金に倦かせて建てた家だつたから、この邊の人達が半ば羨望の意味から「壇の浦御殿」と呼んでゐた程輪奐の美を極めてゐた。殊に今日短歌の會が開かれてゐる座敷は、直ぐ向ふ岸に和布刈神社の朱の廻廊などが見え

て、この家の中でも、一番眺望の好い、こんな短歌の會などをするのには贅澤過ぎる位な、海に向つた二十疊敷ばかりの廣間だつた。

午後一時開會と云ふ通知だつたので、その時刻になるとほつほつ人が集つて來たが、結局會が始められたのは、二時少し過ぎてからだつた。二十五六人の來會者のうちで、十人ばかりは若い女で、みんな優梨子を中心にしてゐる人達だといふことは、彼の女がこれらの人達に對する、一種矜つたやうな態度でも分つた。容色から云つても、才氣から云つても、また金力の點から云つても、彼の女は當然この仲間の女王だつた。殊にこの日の會の幹事をしてゐる東谷狂花などと云ふ男は、まるで奴隸のやうに彼の女に仕へてゐた。

それでもう大抵みんな集つた時分になると、東谷は優梨子の傍へ來て、低い聲で訊いた。「如何です。もう始めませうか。」

と、優梨子はちよつと點頭いてから、

「ええ、もうそろそろ好いでせう。」

それから間もなく東谷は床の間の前に立つて、開會の辭と云つたやうなものを、美文的な調子でやり始めたが、それがするぶん齒の浮くやうなものだつたのにも拘はらず、優梨子の上京を送ると云ふ一節になると、みんなにかなり強い感動を與へたらしかつた。しかし東谷が好い氣になつて意外に長い開會の辭を讀んで、中には苦々しくなつたものもあると見えて、わざとらしい拍手の響を送るものもあつた。さうした開會の辭が終つて、直ぐに兼題「海」の互選と、席題「わかれ」の競詠が始まつた。みんなそこに張り出された「わかれ」と云ふ席題の文字を睨みながら、手帖を出して苦吟に耽り始めた。暫時の間は兼題「海」の集つた歌を書いた紙を順々に廻す響ばかりで、廣間の中はしいんと急に静かになつた。

と、そのうち何處かの隅で、くすくすと忍び笑をする若い女の艶めかしい聲が聴こえた。みんなはその笑ひ聲に誘はれたやうに顔を上げてその笑ひ聲のした方を見たが、それが今廻つて來た「海」の歌の中に何か樂屋落か何かを詠んだ面白い歌があつたので笑つたのだ

と云ふことが分ると、直ぐまたみんな面を伏せてしまつた。

優梨子も女達の中に交つて、紫色の革表紙の小形の手帖を前に置いて、しきりに何か考へてゐる様子だつたが、しかし事實は彼の女の胸は、靜かに歌なんぞ考へてゐられる程落着いてはゐられないのだつた。彼の女が遽かに上京をすることになつたのは、いろいろの事情があるのだつたけれども、その中でも彼の女の心を一番悩ましてゐるのは、上京すれば當然如何にか解決しなければならぬ一つの結婚問題であつた。

その相手の男と云ふのは、今東京の法科大學に通つてゐる、謙一と云ふ青年で、やつぱり子供の時からこの森と云ふ家に養はれて來てゐるのだつた。それだからずつと彼の女とは兄妹として育てられて來てゐるばかりでなく、彼の女は謙一に一人の戀人があると云ふことを疾うから知つてゐて、それに對しては唯一の同情者となつてゐるのである。ところが丁度講演會のあつた晩、彼の女は家に歸ると直ぐ、奥の間でまだその時分まで晩酌をつけてゐる父のところと呼ばれて、そこではつきりと結婚に就ての彼の女の意見を訊かれ

た。そして殆んど命令的に、母と共に上京しなければならぬやうなことにさせられてしまった。

そんなことから、講演會の翌日——能島の宿屋を訪れると云ふ約束をした日も、朝から客があつたり何かしたので、到頭外へ出る機會を失つてしまつて、遂に能島にも逢ふことが出来なかつたのだが、逢へないとなると彼の女には一層あの演壇の上に立つて、恥しうに頬を赧らめながら、伏目勝ちに講演をつづけてゐる能島の姿が、それはもう戀と云つても好い程懐かしく思ひ出された。「杜翁の無抵抗主義、能島辰雄」と筆太に書いて張り出されてゐた紙片までが、何時までも彼の女の目からは忘れられなかつた。

「さうだ。東京へ往つたらまたあの方に逢へるかも知れない。」

さう云ふ考へが胸に浮ぶと、優梨子は何だか急に胸が明るくなつたやうな氣がして、蘇つたやうに顔を上げた。そして一顧ぐるりとそこに集つてゐる人達を見渡したが、不圖彼の女の目が、今來たばかりと見えて、一番隅の方のやつと一人座れるか座れない位のところ

ろに、座り懸けてゐる一人の髪の毛の長い、繪の具に汚れたルバシカを着た、畫家らしい男の蒼ざめた顔の上に落ちるとその顔はまた急に暗く曇つてしまつた。

二

そのうち大抵席題の競詠の歌が出来た時分を見計つて、先づ兼題の「海」の歌の互選の結果から読み上げられた。

この披講の役に當つたものは、やつぱりさつきから幹事として働いてゐる東谷狂花で、彼はひどく氣取つた調子で、最初に最高點の歌を読み上げたが、この歌の作者が優梨子だと云ふことが分ると、何故か少し頬を赧らめながら、もう一度一段高い調子でその歌を繰り返してから、

「ええ、作者は森優梨子さんです。」と付け加へた。

兼題の海の歌の披講は、それから順々につづけられて往つたが、その後読み上げられる歌は、どれも最初に讀まれた最高點の優梨子の歌に比べるとひどく見劣りがしたもののばかりで、容色の點ばかりでなく、才氣の點から云つても、優梨子が誰よりも勝つてゐると云ふことが、みんなの胸に感じられたが、優梨子は自分の歌が最高點になつても、別段これと云つて喜ばしさも感ずることが出来なかつた。そればかりでなく彼の女の胸の中には、さつき遅れてここに入つて來た、あの畫家らしい男の顔を見てから感じてゐる、一種暗澹たる心持が、まだ鬱陶しくつづいてゐた。

「如何してあの人はこんな會になんぞやつて來たのだらう。」

さう思ふと彼の女は、妙に重苦しい不氣味さを感じると同時に、多少惻隱の情と云つたやうな憐れみを感じない譯には往かなかつた。それはその男に對して、彼の女の云つた酷い一語が、どんなにその男を不幸にしたかと云ふことを、彼の女自身でも知つてゐるからであつた。この男は一種不思議なボヘミアンライフを送つてゐる、北田胡沙雄と云ふ漂泊

の畫家で、噂では彼の女のためにこんな自暴自棄な生活をするやうになつたと云はれてゐた。

と、そのうち兼題の「海」の歌の披講がだんだん進んで、もう後二三首になつた時分、不圖優梨子の耳は、これまでの歌とは内容も調子もまるで違つた、技巧は拙いがそれでゐる何處か人を惹き付けるところのある、不思議な魅力を持つた歌の読み上げられるのを聞いた。それは「海よ、お前もおれと一緒になつて彼の女を呪へ」と云つたやうな意味の歌で、彼の女には直ぐにその作者が直覺された。

が、しかし繰り返して歌が読み上げられても、誰もその作者と名告るものがなかつた。東谷も少し焦燥した調子で、

「どなたですか。どうぞ作者の名をおつしやつて下さい。」

と幾度も一座の人達の顔を見廻したが、結局誰も名告つて出るものがないので、その歌はそのまゝ「讀人知らず」とされてしまつて、また直ぐに後の歌が読み上げられた。

かうして兼題の「海」の披講が終ると、それから席題の「わかれ」の互選が始まつて、この詠草が一順みんなのところ廻つた時分は、もうそろそろ向ふ岸にも、灯がちらちら見え始める黄昏時たそがれときとなつてしまつてゐた。

優梨子はさつき「讀人知らず」の歌を聴いてから、何だか一層憂鬱な重苦しい心持にさせられてしまつてゐるが、しかし今夜の夜行で出發しなければならぬ體であると思ふと、歌の會ばかりに關つてもゐられなかつた。大抵は母が仕度をして呉れたのだけれども、それでも彼の女は時々何か忘れたものを思ひ出すと、そつと座敷を抜けるやうにして袍の置いてある茶の間の方へ入つて往つた。で、その時も「海」の歌の披講が終ると、何だか呪はれてゐるやうな不氣味さが感じられてならなかつたので、直ぐにそこを立つて、廊下傳ひに茶の間の方へ歩いて往つたのだつたが、薄暗い曲り角のところまで來ると、彼の女は誰だか背後うしろから後を追つ來るものがあるやうな蹙音を聴いた。と同時に彼の女は、

「優梨子さん。」

と云ふ聲を聴いたので、また東谷が何か相談をするのだらうと思つて振り返つて見ると、それはさつきから不氣味に思つてゐる例の漂泊さまよひの畫家、北田胡沙雄だつたので、思はずぎよつとして立ち留まつた。

「まあ、あなたでしたの。で、何か御用……。」

と、北田はちよつと吃くもるやうな調子で、

「ええ、實はあなたに御饞別を上げたいと思つて持つて來たんですが、受け取つて下さるでせうか。」

「まあ、それは御親切に難有うございますこと。しかしわたくしはもうあなたからの御饞別はあの歌だけで澤山ですわ。」

「あの歌……ああ、あれですか。」さう云つて彼は空虛うつろのやうな聲を立てて笑ひながら、「あれはまああれとして置いて、どうぞ僕のこの饞別を受けて下さい。」

と云つたかと思ふと、彼は優梨子の手は無理に一包みの何とも分らない品物を擱ませて、

影のやうに廊下の向ふに行つてしまつた。そして優梨子が再び廣間に姿を現はした時には、もうそこには髪の毛の長い、ルバシカ姿のこの漂泊の畫家の蒼ざめた顔は見られなかつた。

「それでは席題の互選の歌を読み上げます。」

さう東谷は云つてから、またさつき兼題の「海」の歌を披講した時と同じやうな順序で、席題の「わかれ」の歌を読み上げたが、もうその時分にはみんな倦きて來てゐる上に、夕飯の時に出された麥酒に酔つてゐるものなほもあつて、一々その歌に聴き入つてはゐないのだつた。唯時々「優梨子の君に」とか何とか云ふ面白い歌などが読み上げられると、みんなどつと一時に笑ひ崩れた。かうして今までしめやかだつた歌の會も、夜に入ると急に送別會らしい賑やかさに變つて往つた。が、このうち優梨子の出發の時刻がだんだん迫つ

て來たので、いよいよ散會をすることになつたが、それでも極く親しい二三人の女の友達と、今日の幹事として働いた東谷だけは、後まで残つていろいろ荷物の世話を焼いたりしてゐた。

優梨子の乗る列車は、十時何分かの下の關發だつたが、旅馴れない女伴れのことでもあるから、少し早目に停車場に往つてゐる方が好いだらうと云ふので、九時になると自動車に來るやうに呀付けて、それまで彼の女達は、母親も一緒に、茶の間でいろいろの話をした。海峡を通り過ぎる船の汽笛の音も、もう當分聴かれなかつたと思ふと、彼の女はさすがに涙ぐまれた。そのうち自動車が來たので、一臺には彼の女と母親とが乗り、一臺には東谷や彼の女の女の友達が乗つて、壇の浦の家を出たのだつた。

しかし、かうしてみんな送られて、停車場へ急ぐ自動車の中でも、優梨子の心の中には、明暗二つの影があつた。——明るい方は外でもない、東京へ往けば日頃から懐しいと思つて敬慕してゐる、それはかう無意識のうちに戀と變つてしまつてゐる能島に逢ふ機會が、

何時か得られると云ふことだつた。そしてもうひとつの暗い方は、當面の問題の結婚のことで、これは到底養父母達の思ひ通りに往かないことは分つてゐたので、その場合の暗澹たる家庭悲劇は、もう大詰の幕までが彼の女には大抵想像されてゐた。兄の謙一にも戀人があり、彼の女にもまた意中の人があると云ふことが分つた場合の、兩親の憤怒や悲歎を思ふと、彼の女は何となく今度の上京の心が進まなかつたが、それでもまた能島に逢ふ場合を想像すると、何となくこの旅の前途にも、光明があるやうな氣がして、ひとりで胸が躍るやうな心持になつた。

「さうだ、若し兩親の怒りに觸れて、家から追ひ出された場合には、何でも能島先生に相談して、自分の往くべき道を極めて貰はう。こんな家の養女になつてなつてゐるよりも、たとへ貧乏をしても、自分一人で自分の生きて往く道を拓いて往つた方が、どの位好いか知れやしない。」

結局そんなことを考へて、ひとりで自動車の上で微笑んでゐるうちに、優梨子の乗つた

自動車は、狭い灯の明るい街や、夜店の並んだ海岸通りを通り過ぎて、もう何時の間にか停車場の前の廣場に來蒐かつてゐた。そして間もなく彼の女は大勢の若い男女の人達に迎へられて自動車を下りた。

「如何もわざわざお見送りに來て下さつて、濟みませんこと。」

彼の女はもう自動車を下りると、すつかり心の中から暗い影は振り落してしまつたやうな様子で、こんなことを云ひながら、見送りに來てゐる人達に挨拶をして廻つてゐたが、さうやつて大勢の人に取り圍まれてゐるところを見ると、彼女はやつぱりこの中での「女王」であつた。彼の女の外には、誰も彼の女程の美しさを持つてゐるものがなかつた。

「何でせう。女優ですかな。」

「いや、さうぢやありませんまい。女優にしては品がありますよ。」

さう云ふ言葉が、待合室の一隅で囁き合はれてゐる程、彼の女はそこに居合はせた多くの人々の注目を彼の女の一身に集めてゐた。彼の女もまた一種の矜りかな心持で、多くの

人々の目をその全身に感じてゐた。

と、もう開札口では、切符を切り始めてからのことであつた。彼女の女はまた改めて「女王」らしい態度で、みんなに挨拶をして廻つてゐたが、不圖入口からこつそり入つて来た一人の若い紳士の姿を見ると、思はずびつくりしたやうな顔付で、小走りに近寄つて往つて聲を懸けた。

「まあ、能島先生……。」

これは、思ひも懸けない、まだ九州路の講演旅行をつづけてゐる筈の能島が、如何云ふ譯か、今彼の女の目の前に立つてゐるのだつた。

四

能島も優梨子にかう呼び懸けられるとびつくりしたやうな様子で、

「ああ、優梨子さん。」

と云つたが、みんなの目が二人の上を集つてゐるのに氣が付くと、ちよつと極りが悪さうに立ち棘すずんだ。が、直ぐにまた氣を取り直したやうに話し懸けた。

「何ですか、何處かへこれからお出懸けなんですか。」

「ええ、これから東京へ往かうと思つてをりますの。」

「東京へ……。さうですか。お一人ですか。」

「いいえ。母と二人で……。」

と云つてから始めて氣が付いたやうに母を紹介ひきあはせた。そして二人の挨拶が終るのを待ちかねたやうに、彼の女は能島に向つて訊いた。

「先生はこれからどちらへいらつしやいますの。まだ講演旅行がおありになるんでせう。」

「いいえ、僕はもうこれからずつと東京へ歸るのです。講演旅行は何だか厭になつたら、中途から一人抜けて來ました。」

と、優梨子はさもびつくりしたと云ふやうに、目を見はつて、

「まあ、先生がお演りにならなかりやこれから先き、どんなにみんなが失望するか知れやしませんわ。」

「いや、僕なんかほんの頭数ですから、誰も失望するものなんかありませんよ。しかし東京へいらつしやるのなら丁度好い。御一緒にまゐりませう。」

「ええ、先生さへ御迷惑でなければ一緒に連れて往つて頂きますわ。女ばかりで何だか心細かつた所ですから……。」

そんな話をしてゐるうちに、もうみんな汽車に乗つてしまつたと見えて、そこいらは急に静かになつてしまつたので、能島は不圖氣が付いたやうに促がして云つた。

「さあ、もう出やうぢやありませんか。」

「ええ……。」

そして二人が先きに立つて改札口を出ると、後からこの「女王」を見送りに來てゐた人達は、ぞろぞろつづいてプラットフォームの方へ流れ出した。優梨子を見送りに來てゐた

人達は大抵講演會を聴きに往つたものなので、直ぐ能島と云ふことが分つたので、中には馴々しく挨拶するものでもあつて、そこらは以前よりはまた一層賑やかになつた。能島の取つた寢臺も、丁度優梨子達の直ぐ傍だつたので、彼の鞆もまめまめして働いてゐる東谷の手で、直ぐにこの車室の中に運び込まれた。

そのうち發車の時刻が迫つて來たので、能島も優梨子も車臺のデッキのところ立つて、別れの言葉を見送りの人達と取り交はしてゐたが、突然發車を知らせる鈴びんの音がけたましく鳴り渡つて、汽車が徐かに動き出すと、優梨子に對する「御機嫌よう」の言葉がみんなの口から云はれると同時に、能島に對する「能島先生萬歲」と云ふ叫び聲が、そこに群がつてゐる人達の中から起つた。

と、この時今閉ぢたばかりの改札口を、無理に押し破つて、一人の青い職工服を着た男が驅け込んで來た。そしてもう動き出してゐる列車よりもはや早く、プラットフォームの上を走つて往つたが、デッキの上に立つてゐる能島の姿を見ると、その男は出來るだけ大きな

第一編
彼の女の罪

曉

聲を出して叫んだ。

「能島先生僕も往きます。東京へ往つてあなたの運動に加はります。二三日うちに……二三日うちにきつと往きます。」

さう云つてからみんなと一緒に聲を合はせて、

「野島先生萬歳……。」

その青い職工服を着た男は、あの大川真吉だつた。

鳩の家

六三

鐘 曉

夏も過ぎ、秋も過ぎて、東京の市中には、もう凜のやうな師走しせの風が吹き荒んでゐた。例年なればもうその時分になると、歳晩の賣出しや何かで、何となく街には賑やかな、慌あはただしい気分が見えて来るのだけれども、不景氣の影響の殊に激しい都會では、徒らに酷むじいやうな冬の日光が、じり／＼と往來の上に漲つてゐるばかりで、何時になくもの寂しい師走だつた。偶たまには「歳末賣出し」と云ふ旗などを立て、街を練つて往く廣目屋の囃子はやしを見懸けることもあるが、鳴らし立てる太鼓や鉦の響までが、如何でもなれと云つたやうな、ひどく棄鉢な調子に聽こえた。

さう云ふ十二月ももう半頃になつてからのことだつた。淺草の馬道も公園寄りの或る横町に、ちよつと見たところ救世軍とでも思はれるやうな、この邊にしては可なり變つた、赤ペンキ塗りの家が出来た。勿論それは新たに建築したのではなく、安西洋料理屋の夜逃げをしてしまつた後を借りて、表をすつかり塗り直したものであつたが、それだけでも色が赤いだけに全體の感じがすつかり變つた。ひどく不思議な家が出来たやうに近所の人達からも噂された。それに表の屋根の上の看板に大きくこれだけ白いペンキで、「鳩の家」と書かれた文字が、一層この家を不思議なものにしてしまつた。

「何でえ、こりやあ……。観音様の鳩の住む家にしちやあ、何だか耶蘇やそく臭へ家ぢやあねえか。」

時にはこんなことを呟いて通るものもあつた。かと思ふとまた、酔漢などはわざ／＼この家の前に立ち留まつて、

「へつ、何だ。鳩の家だ。變な銘酒屋が出来やがつたな。」

彼の女の罪

六三

と云ひながら家の中を覗き込んで、女のゐないのに失望して往つてしまふものなどもあつた。

と、この「鳩の家」が出来て二三日経つてからのことだつた。今度は以前「西洋御料理××亭」と書いて軒先に吊るしてあつたかなり大きな懸看板の、これもやつぱり赤く塗り替へられてゐたところに、同じ白ペンキのかなり大きな字で、「苦しむものは來れ、悲しむものは來れ」と二行に並べて鮮やかに書かれた。そしてそれと同時に、屋根の上の看板にも「鳩の家」としてある兩側に、それよりはやく小さく「敵を愛せよ、惡に抗する勿れ」と云ふ文字が書き加へられた。

これを見ると近所の人達は、やつぱり耶蘇だと云ふことに極めてしまつて、この横町を遊び場にしてゐる子供達は、

「耶蘇、耶蘇、糞坊主……」

など云つて、中には石などを投げ込むものなどもあつたりしたが、そこからはまだ

度も讚美歌の聲などは聴かれなかつたし、日曜が來ても別に集會あつまひのやうなものが催される氣勢けいせいも見えなかつたから、この「鳩の家」と名づけられた赤く塗つた家は、依然として近所の人達の目からは、ひとつの不思議な家として見られてゐた。

殊にこの邊は貧しい人達の多いぐみくした長屋町で、この「鳩の家」も貧民相手の小さな質屋と、勞働者相手の酒呑相手の汚ない居酒屋の間に挟まれてゐるから、多くの人達の目にも着いたし、多くの人達の噂にも上つた。毎晩のやうに極まつて飲みに来る居酒屋の定連の中には、もうこの家のことを「赤ペン」と云ふ符牒で呼んでゐるものもあつた。

と、それからまた二三日経つてからのことだつた。この近所の長屋町の家毎に、一人の勞働者風の汚ない青い色の服を着た男が安つほいザラ紙に刷つた、一枚のピラを配つて來た。それには次のやうな文句が、殆んど假名ばかりで誰にでも讀めるやうに書いてあつた。「今晚から毎晩「鳩の家」で面白いお話がありますから聴きに來て下さい。殊に悲しいことのある人や、苦しいことのある人は、是非來て話を聴いて下さい。」

一體この「鳩の家」と云ふのは、能鳥と大川に依つて企てられた、一種の愛の福音の宣傳所——云ひ換へれば哀れな靈魂の救済所なのだつた。

能鳥がかう云つた事業を始めるまでには、兎に角夏から冬になるまで、かなり長い間のさまじい心の経過があつた。彼は九州の講演旅行で、自分の講演が如何に人の心を動かすかと云ふことを目の邊見せられると、自分の辯舌に對して、かなり強い自信を生ずると同時に、何だかもう原稿などを書いて、筆で自分の心持を他人に傳へると云ふやうなことを、低悟しく思はずにはゐられなかつた。演壇の上に立つて、熱辯を揮つて吐き出す言葉に對する反響は、筆を執つて力を籠めて書いたものに對するものよりもつと直接で華やかであるところからすつかり彼を英雄的な心持にしてしまつた。何時までも耳について離れない拍手の音は、彼に取つては戀の囁きよりもつと力強い誘惑だつた。

かうした英雄的な心持になつてゐるところに、彼は圖らずも博多の宿屋で大川の訪問を受けて、まづこの持つて來た戯曲の「一人の死」に感心させられると同時に、話し合つてゐるうちにだん／＼彼の胸に迫つて來る、燃えるやうな熱情に動かされてしまつた。そして二人で興奮して話してゐるうちに、彼は遂にこれまで一度も誰に向つても云つたことのない、彼の現代の社會に對する意見——それは無論日頃から彼の信じてゐるトルストイの無抵抗主義から出發した、見方に依つてはかなり過激に思はれるやうな意見を語つたのである。

彼の殉情的な言葉は、どんなにこの無垢の勞働者の心を動かしたらう。更に進んで彼がこの意見を實行するための運動方法などを、やゝ空想的ではあつたが非常に熱心に、目を輝やかしながら語つた時には、大川の目には微かに涙さへ浮んで來るのを見たのだつた。で、彼の言葉が終るのを待ち兼ねたやうにして大川は感激した調子で云つた。

「先生、私は是非あなたのその運動に加はらせて貰ひます。私は明日にも職を抛つて、先

生と一緒に働きます。先生……どうぞ私が先生のために……いや、先生のためばかりぢやありません、多くの哀れな靈魂のために働くのを許して下さい。」

能島が下の關の停車場を發つ時、出發の間にブラットフォームに走り込んで來た大川が、彼のために「萬歳」を唱へたのは、つまりはこの時の感激の引きつゞきに外ならなかつた。

能島はかうしてすつかり英雄的な心持になつて東京に歸つて來た。歸りの汽車の中でも、彼が到頭柳澤や江南や宮島と別れて、一人講演旅行の半途から、一行を脱^かけて歸らなければならなくなつた感情の衝突を思ふと、これまでの友情が濃やかだつたゞけに自然憂鬱な心持にさせられたが、しかし幸ひに優梨子が一緒に列車に乗り合はせてゐたので、いくら彼の心も慰められた。が、東京に着いてこの美しい崇拜者と別れると、彼はかへつて前よりも一層暗い心持にならずにはゐられなかつた。

「二三人の友が何だ。人類全體を友としろ。人類を友とするものが何で寂しい。もつと頭

を上げろ。もつと目を見開け。そこには美しい路がお前のために開けてゐるではないか。さあ、進め。今だぞ、お前の日頃から往かうと思つてゐる路へ往くのは。」

こんな言葉を心の中で、自分で自分を叱咤するやうな調子で繰り返して見たけれども、一度重く、暗く、霧に閉されたやうになつた胸は、中々元通り明るくはならなかつた。彼は英雄的な心持になればなるほど、如何にもならないやうな憂鬱を感じた。が、彼自身ではそれを唯一種悲壯な心持だと解釋してゐた。

それからいよいよこの「鳩の家」を始めるまでの四ヶ月の間を、彼はどんなに自分の心と戦つたか。孤獨、迫害、嘲笑、貧苦——さう云つたものを覺悟して取り懸からなければならなかつた仕事だけに、彼のたつた一人の家族——老いた母親の顔を見ると、先づ心の沮む^はを覺えたが、しかしそんなことは格別彼の仕事を始める障害とはならなかつた。それよりも彼の心を苦しめたものは、優梨子のあの魅力に富んだ黒い瞳から來る誘惑だつた。

優梨子は東京の停車場に着くなり、出迎への自動車に乘せられて、母と一緒に本郷の西片町にある、彼の父の別邸に伴れて往かれた。そしてそこに待ち受けてゐた父の前で、彼の女はかなり思ひ切つて、結婚の自由を説き、更に進んでは女性の解放をまで叫んだものだから、無論それまで運ばれてゐた結婚談は破れると同時に、両親に對して叛逆を企てた不幸者として、まるで罪人のやうな取り扱ひを受けるやうになつた。さう云ふ時に、彼の女の胸に思ひ出されるのは、能島の外に誰がるやう。優梨子は直ぐに能島に向つて、彼の女の今の苦しい境遇を訴へて同情を求め手紙を書いた。が、書いてゐるうちにそれは何時の間にか、切なる念おもひを打ち明けなければならぬやうな心持になつてしまつてゐた。

能島からの返事は直ぐには來なかつた。そして二三日経つてから來た手紙も、彼の女が期待してゐるやうなものではなく、「自分は今誘惑を怖れてゐる」とか、「自分には今まだ到底あなたを救ひ出すだけの力がない」とか、さう云つたやうな言葉ばかりが書き列つらねてあつて、何ごとにか懊惱おぼをしてゐる男の心持がまざ／＼と手紙の上にも現はれてゐた。そし

てそれから後二三度出した手紙は「轉居先不明」と云ふ符箋が附いて戻つて來た。優梨子
が家出をしたのは、それから間もなくのことだつた。

大川の上京は能島の決心を早めて、彼はもう何事をも振り棄て、自分の往くべき路に進まうと思つた。そして新たに出版した著書から得た僅かの印税で、この馬道の横町にあつた安西洋料理家の跡を借り受けて、そこに彼が最初の事業であるところの哀れな靈魂の救濟所を設けたのだつた。

かうして彼等の仕事は始められた。

三

ピラを配くばつて歸つて來ると、大川は格別疲勞をした顔付もせず、土間の隅の方の椅子に腰を掛けて、何かしきりに手帖に書いてゐる能島に向つて聲を懸けた。

「先生。配つて來ましたよ。面白うござんすね、こゝいら邊は。子供達は活動寫眞のピラ

配りだと思つて、呉れ呉れつて云つて寄つてたかつて来るし、大人は大人で癡兵と間違へやがるし……は、は、は、何しろこんな面白れえことはねえや、ねえ、先生。今夜はきつとこゝには入り切らない位やつて來ますぜ。」

「如何だかな。」

能島は浮かない顔付でさう云つてから、やつと氣が付いたやうに大川に向つて、

「いや、何しろ如何も御苦勞様。如何だい、ちよつと風呂に往つて來ては。」

「なあに、まあ、好うござんす。まだ私の用もあるんだから……。」

かう云ひながら大川は土間の隅から釘箱や鐵鏈を持ち出して來て、古い腰掛の脚の取れか、つたのや何かを直し始めた。

土間は丁度間口が三間に、奥行がやつぱりその位あつて、以前はこゝに卓子や椅子が置いてあつたのだらうが、今はこんなものはみんな取り拂はれて木造りの古い腰掛が、まるで學校の教室のやうに、ずらりと十列ばかりに並べてあつた。そして正面の壁のところ

は、黒い額縁に入れられた、かなり大きなトルストイの寫眞が懸かつてゐて、その兩側には表の看板に書いてあるやうに、「惡に抗する勿れ」と云ふ文句と、「敵を愛せよ」と云ふ文句を、墨黒々と太い字で書いた細長い紙片が、聯のやうに並べて下けてあつた。能島はそのトルストイの寫眞の直ぐ前に置いてある、たつた一つの机に向つて椅子に腰掛けて、前に展ひらげた外國語の書ほんから、何か手帖に寫してゐた。彼は病みあがりだと見えて、顔の色も少し蒼ざめてゐたし、目も何となくどんよりと曇つてゐた。

二人はそれつきり黙つてしまつたので、この家の中には唯釘を打つ鐵鏈の音ばかりが響いてゐるが、そのうち能島が二三度つゞけて咳せきをしたので、大川は不圖氣が付いたやうに顔を上げた。

「先生。如何です、氣分は。」

「あゝ、有難う。もう何ともないよ。大丈夫だ。」

「しかし、氣を付けなくちやあいけませんぜ。風邪だつて馬鹿に出來ませんかね。」

「だから大事を取つて昨日まで寝てゐたんぢやあないか。それでなけりやもう引つ越すなり仕事を始めやうと思つてゐたんだ。」

さう云つてから能島は、わざと元氣を振り起すやうな調子で、

「だけど、ねえ、大川君。かうやつて仕事を始めて見ると、何とも云へない程愉快ぢやないか。見たまへ、もう二三年の間に、僕等の仕事がどんなに大きなものになつてゆくかつてことを……。愛の力程強いものはないからなあ。」

「そりやあさうですとも。私は何にも難かしいことは知りませんが、愛の力のどんなに強いかと云ふことだけは分りますよ。」

「さうだらう。それだけ分つてゐて呉れりやあ澤山だ。僕はやるよ。するぶんこの仕事を始めるまでには迷ひもしたが……。もうかうなりやあ僕は一生懸命だ。命を賭しても僕はきつとやつて見せるよ。君があゝの戯曲で書いたやうに、一人の死が幾千幾萬の人の命を救ふことが出来る場合が來れば、僕はきつと潔くこの命を棄てゝ見せるよ。」

さう云ふ能島の目には、何時か涙が光つてゐた。

大川は自分の感激の遣り場がないやうに、急に鐵鎚を揮り上げて、力一杯腰掛に釘を打ち込んだ。

四

しかしその晩この「鳩の家」に話を聴きに集つて來たものは、思つたよりも少なかつた。

それに集つて來たものも、冷やかし半分時間潰しに來たと云つたやうな輩ばかりで、殆んど眞面目に話を聴きに來たと云つたものは一人もなかつた。が、能島はもとよりその位のこととは覺悟してゐたので、六時になるとこの僅か七八人ばかりの聴衆に對して、熱心に彼の信ずる無抵抗主義の宣傳を始めた。

能島の話は、やつぱり彼が下の關の處女講演でやつたやうな「愛の福音」を説いたものだったが、それでもこゝではすつかり通俗的に、いろ／＼と卑近な比喻や輕快な警句を交へ

て、なるべく聴衆に興味を起させるやうに話したから、一時間半ばかりに亘る長い話も、みんなは格別倦怠も感じないで、かなり面白がつて聴き入つてゐた。が、彼の話がもう終りに近付いてからのことだつた。

「それですから私は、皆さんの御相談相手となるために、こゝにこんな家を作つたのであります。人間は誰にも悲しいことや苦しいことが澤山ある。さう云ふ悲しいことや苦しいことから、如何にかして救つて上げたい、と云ふのが、私の今抱いてゐる希望なのであります。それですからどうぞ皆さん、悲しいことがあつた場合とか、または苦しいことがあつた場合とかには、どうぞ私のところにいらして下さい。私はたとへこの命を投げ出してでも、必ずあなた方を救はずには置きません。それでは私のやうなものが、何でああなた方を救ふことが出来るか。それは唯愛の力です。愛の力は幾千幾萬の人でも必ず救ふことは出来るのであります。」

と云ふ彼の言葉が、まだ終るか終らない時、突然荒々しく表の硝子戸を開ける音がした

と思ふと、ひどく酔つ拂つた呂律の廻らない女の聲で、

「何だい。何が愛の力なのさ。」

と云ひながら一人のまだ二十一二位の、如何見ても私娼としか思はれない、色の白い婀娜つほい女が入つて来て、そこに突つ立つたまゝちつとなまめかしい目で能島の顔を見据えた。

能島はちよつときよつとした様子だつたが、直ぐに落着いた調子で云つた。

「いや、よくいらつしやいました。さあ、どうぞお掛け下さい。」

「よくいらつしやいましただつて……何を云つてゐるのさ。一體何なの、こゝは。耶穌にしちやあちよつと變だし……あたしやあやつぱり前の通り、西洋料理屋だと思つて入つて来たんだけれど……。」

「はゝゝゝ、こゝはお前無錢の寄席よ。」

さう云つたのは聴衆の中の一人で、少し酔つてゐる男だつた。

「無錢の寄席……そいつは好いわね。あたし聴くからやつて頂戴。落語でも講釋でも何でも好いわ。」

「いや、ここはそんなものぢやありませんよ。ここはね、苦しい人や悲しい人のためにある家なんです。」

能島が話を止めたまま困つたやうな顔付をしてゐるのを見て、大川は堪らなくなつてこの女の傍に来て、慰撫^{なぐさ}めるやうにかう云ふと、女は急に面白さうに笑ひ出した。

「は、は、は。そいつは丁度お誂^{あつち}へだわ。あたしやあもう悲しいことや苦しいことが、この胸に入りきらない程澤山あるの。かうやつてお酒を飲んでゐるんだつて、唯飲んでゐるんぢやあないわ。悲しいことや苦しいことを忘れたいからこそ飲んでゐるんだよ。ねえ、お前さん。お前さんはあたしの身の上話を聴いて呉れない。ねえ、聴いてお呉れつてば……ねえ、好いだらう。」

と、云ひながら大川の手を握らうとする拍子に、蹠^{よち}蹴^ちけるやうにしてその腰掛の上に

腰を下ろしたが、それと同時に急にまた酔が出て來たものと見えて、何かぶつぶつ呟いてゐるうちに、ぐつたり横向きに倒れたかと思ふと、もう微かな薪を立てて眠入つてしまつた。

この酔つ拂ひの女の騒ぎのために、能島の話は中絶されてしまつたが、しかしもう終ひに近いところだつたので、別に大した妨げにもならず、それから五分間ばかり喋つてから、その夜の彼の講話を終つた。

聴衆が歸つてしまふと、能島は始めてほつとしたと云つたやうに一息吐いて、大川に向つて話し懸けた。

「思つたよりも聴き手が少なかつたが、しかしみんなよくおとなしく聴いて呉れたね。」

「ええ、それにあなたの話も上出来でしたよ。今に御覽なさいここに入りきらない位大勢聴きに來るやうになりますから。」

さう云つてから大川はちよつと腰掛の上に酔つて寝てゐる女の方を目で示して、

「先生。如何しませう、この女は。」

「さうだなあ。まあ、酔が覚めるまで、寝かし置くより外仕方があるまい。それにその女こそ僕達が第一番に救はなければならない哀れな靈魂の持ち主かも知れないからなあ。」

傷ける鳩

その翌朝のことだつた。

大川は六時頃不圖目が覺めたので、昨夜の女は如何したらうと思つて、もう硝子戸から曉の青白い光の差し込んでゐる表の土間を、そつと起きて往つて覗いて見ると、女は腰掛を三つばかり寄せ並べて、その上に布團を敷いて寝かせられた昨夜のままの姿で、まだぐつすりと寝込んでゐた。

身装や體付こそもうすっかり自墮落になつてはゐるが、顔の輪廓なども整つてゐるし、色もくつきりと白くつて、根からかう云ふ商賣をしてゐるものではないと云ふことと、か

うなるまでの傷ましい徑路が、大川にもいくらか察せられた。で、彼はもう昨夜からかなり同情した心持にさせられてゐたので、自分の布團をそつくりこの女に被せてやつたりしてゐたのだが、かうした朝のいぎたない寢姿を見ると、また一層この女が憐れになつて、かなり長い間ぢつとそこに立ち盡くしてゐた。

と、女は眠つてゐながらもぢつと凝視めてゐる男の目をその體に感じたものか、不圖魔はれたやうに目を覺ました。そして自分がまるで思ひもつかないやうなところに寢てゐるのに氣が附くと、びつくりしたやうな顔附で、四邊の様子を見廻してゐたが、そのうち不圖そこに立つてこつちを見てゐる大川の目に出會ふと、急に何か可笑しいのか、咽喉を鳴らすやうにして笑ひ出した。

「はゝゝゝゝ、あたしやあ一體如何したつてえんだらう。ねえ、あなた。一體ここは何處なんですか。」

さう訊かれると大川も、思はず一緒に聲を立て、笑つてから、

「はゝゝゝゝ、やつと目が覺めたかね。昨夜はひどく好い機嫌だつたぢやないか。起さうと思つたけれど、起きるどころの騒ぎか、まるで正體がないんだもの。どの位困らせられたか知れやしないぜ。」

と云ひながら土間に下りて、いつも能島の腰掛ける椅子に腰を下ろした。

「さうねえ。昨夜はするぶん飲んだから正體がなくなるのも無理はないわ。だけれど變だわねえ。ほんとにここは何處なんだらう。ねえ、あなた。教へて呉れたつて好いぢやないの。」

女は起き上がつて、まだ不思議で堪らないと云つたやうな顔附で、四邊をぢろぢろ眺めてゐたが、不圖壁に懸けてあるトルストイの寫真を見付けると今度は、

「あのお爺さん誰なの。」と訊いた。

「あゝ、これか。これはね、トルストイつて露西亞の偉い小説家さ。」

「へえ、露西亞の人……。何だか小説なんか書きさうにもないお爺さんだわね。」

さう云つてから女はやつと分つたと云つたやうな顔付で、

「あゝ、それぢやああなたは小説家なのね。さうなんでせう。それであんな人の寫眞を懸けて置くんではせう。」

これには大川も苦笑をせずにはゐられなかつた。

「笑談せうだん云つちやあいけない。小説家なものか。僕は職工だよ。」

「職工……。何處の工場に出てんの。」

「何處の工場つて……。以前は鐵工所に出てゐたけれど、今はこの人間の靈魂の工場に出てゐるのさ。」

この言葉を聴くと、女はまた可笑おかしくて堪らないと云つたやうに、胸を押へながらくつくと笑つた。

「はゝゝゝ、馬鹿だわねえ、この人は。靈魂の工場なんてものがあつて堪るもんですか。」

ほんとにそんな笑談ばかり云つてゐるに……は何處だか、教へて呉れたつて好いちやないの。」

「うん、それぢやあ教へてやるよ。その代りお前さんの名前も教へて呉れなくちや厭だよ。」

「あゝ、好いともさ。あたしの名はお鳥つて云ふの。」

「あゝ、さうか。好い名前だね。お鳥さんならまんざら縁のないこともない。……ここは「鳩の家」つて云つて、悲しいことのある人や苦しいことのある人を救つて上げるところなんだよ。」

大川はさう云ひながらも、何だかこの女がいぢらしくなつて、ひとりでに聲が潤うるんで來るのを感じた。女も何だか男のさう云つた心持を感じたやうな様子で、急にしんみりした調子になつて云つた。

「あたしには悲しいことだつて苦しいことだつて澤山あるんだもの……。それぢやあここに來て救つて貰はうか知ら……。」

二人が不圖口を噤んで黙り込んでしまつた時、二階から階子段をみしりみしりと危なつかしさうに下りて来る足音がして、能島が寢不足らしい顔を出した。

「やあ、やつと目が覺めたね。如何だい。心持は何ともないかい。」

「えゝ別に苦しいやうなこともないやうです。」

大川が女に代つてさう答へると、能島はちよつと笑談と思はれるやうな調子で、

「さうか。それぢやあひとつ今朝は、昨夜聴き損なつた身の上話でも聽かせて貰はうかね。」

二

三人はそれからこの土間の真ん中に、能島の机を持ち出して、それを圍んで粗末な朝飯を食べることにした。お鳥も昨夜ぐつすり眠つたので、別に宿醉うかまひもしてゐないと見えて、女らしく茶碗や箸を臺所から運んで來たり何かして、すつかりこの家の人になつたやうにして手傳つてゐた。そして間もなくこの土間で飯と味噌汁とだけの貧しい朝飯が始められた。

た。お鳥が楽しさうに働いてゐるのを見てゐると、能島も大川も何となく涙ぐましいやうな快さが感じられて、ひとりで言葉數も多くなつた。

「鳩の家に牝鳩が一羽舞ひ込んで來たと云ふ形だね。」

能島がいつもに似合はず口輕にこんなことを云ふと、お鳥も直ぐにその言葉に附いて云つた。

「えゝ、さうですわ。あたしは怪我をして迷ひ込んで來た、可哀さうな牝鳩なのよ。」

と、大川は氣が付いたやうに、

「あゝ、さうでしたね。さあ、お鳥さん。昨夜わざわざ身の上話を聽いて呉れつて云つたなり眠つてしまつたんだから、今朝改まつてその話を聽かうぢやないか。若し自分の話として話し難いなら、今云つた怪我をして迷ひ込んで來た牝鳩の話としても聽いても好い。」と云つてから能島の方を向いて云つた。

「ねえ、先生。これは是非聽かせて貰ひませうね。」

さうすると能島も眞顔になつて、

「さうだ。傷つける鳩の哀れなる物語を、是非聴かせて貰はうぢやないか。」

かう二人に強請むやうに云はれると、お鳥は何だか話し難くなつたものか、急に話を紛らすやうに笑ひ出した。

「はゝゝゝ到頭あたしを鳩にしちまつたのね。だけどあたし酔つ拂つてゐる時なら話しいげれど、かう酔が覺めてしまつては何だか極りが悪くつて話し難いわ。」

「まあ、好いぢやないか。酔つ拂つてゐるものと思つて話したまへ。」

さう能島が云ふとお鳥は執拗く首を振つて、

「厭よ。あなた方はあたしに身の上話をさせて置いて、小説にでも書く氣なんでせう。」

「笑談云つちやいけない。そんな人の悪いことはしやしないよ。」

「きつとね。そんなら話すわ。」

お鳥はさう云つてから、ちよつと黙つて何か思ひ出すやうな様子をしてゐたが、暫時す

ると、まるで人が變つたやうなしめやかな調子で話し出した。

彼の女の話しした身の上話を、ちよつと搔いつまんで梗概だけを述べればかうなのである。――

彼の女は太陽齋天女と云ふ、その當時ちよつと美しい花形として賣り出してゐた、女魔術師の私生兒として生れた。母の天女は彼の女を生んだ時は、まだやつと二十になつたばかりだつたが、それでもさう云つた商賣をしてゐる上に、かなり放縱な性質だつたから、もうかなり多くの男とも情痴生活を送つて來てゐたし、するぶんいろいろな人ともさう云ふ噂を立てられてゐた。それだから彼の女が生れた時、私生兒として届けなければならぬいやうなことになつたのは、全く無理もないことなつた。

暗黒の子は暗黒に生きてゆく。彼の女のやうに母の胎を出る時から自分の墓石を背負つてゐるやうな哀れな運命の星の下に生れた暗黒の子は、如何に蕩擻しても叫んでも直走つても、中々光の巷に出られるものではない。光は微かに遠く、空のあなたに見えてはゐ

るが、しかしそれは到底生きてゐる間には、往き着くことの出来ない位遙かに、遠い遠い空のあなたなのである。暗黒の子としてこの世に生れた彼の女の運命は、もう生れた時から大抵分つてゐた。

彼の女はその人氣に觸ると云ふので、母さへも母と呼ぶことは出来なかつた。旅から旅へ渡つてゆく人のことだから、無論七つ八つにはなつても學校などにはやらずに、直ぐにもうやさしい小奇術を二つ三つ教へられて、銀色の飾りの附いた桃色の洋服姿で舞臺の上に立たせられた。最初は何だか大勢の人の前に出るのが怖ろしかつたが、暫時しばらくするともうそんなことには慣れてしまつて、かへつて綺麗な着物を着て、舞臺へ出るのが楽しみになつて來た。喝采の聲や拍手の音は、彼の女の子供らしい心をさへ唆そそつた。

かうして彼の女はだんだん大きくなつて往つた。が、もう十四五になつて「小天女」と云ふ彼の女の藝名が評判されるやうになると、そろそろ彼の女の周圍には多くの男の誘惑の手が近付いて來た。と同時に彼の女もまた、母から享たけついで放縱の血が、だんだん火

のやうに熱く燃え上がるのを感じて來た。暗黒の子の彼の女が暗黒の世界にあつて、如何してかうなつてから無事であるやう。彼の女は十五にして早くも男を知つた。しかもその男と云ふのは彼の女の母の情夫である、やつぱりこの一座にゐた自轉車の曲乗をやる秋山と云ふ男だつた。

そのことが母に知れると、そこには全く何と云つて好いか分らない程淺あさま猿しい闘たたかひがあつた。そしてその秋山はその一座から逐おひ出されるし、彼の女も母のところから遁にげ出さなければならなかつた。

「それから今日になるまで、あたしはほんとにどんなに苦勞したか知れませんか。」

お鳥はさう云つてから悲しさうに目をしばたゝいた。

三

「ふうん、さうかい。それで今君は何をしてゐるんだい。」

能島がさう云つて訊くと、彼の女はまた急に自棄な高笑ひをして、

「ほーほー、そんなこと訊くだけ野暮ぢやありませんか。こんなになつた女に何が出来るもんですか。あたしのやうな女に出来る商賣つて云へば、たつた一つしかないんですよ。」と云つてから突然能島の手を持つてゐた巻煙草を奪つて喫し始めた。

能島は今お鳥から身の上話を聴かされてゐるうちに、何とも云へないやうな悲痛な心持にされると同時に、この世は「涙の谷」であると云ふことを、しみじみ感じないではゐられなかつた。彼の女の話を聴いてゐながらも、臉の裏がひとりでに熱くなつて来るやうな心持がして、幾度心の中で「哀れなる傷ける鳩よ」と叫んだか知れなかつた。たとへ昨夜酔つ拂つた紛れに、ここが哀れな靈魂を救ふところの「鳩の家」だと云ふことを、知らずに入つて來たのだと云つても、如何してこの哀れな靈魂を救はずにゐられやう。闇黒の世界から光明の世界へ——日光が温かに輝き渡つた明るい大空を飛ぶことが出来たら、鳩はどんなに喜ぶだらう。

彼はそんなことを考へながら、さも甘さうに煙草を喫してゐる女の顔を、黙つてぢつと眺めてゐるが、暫時すると思ひ切つたやうに聲を懸けた。

「おい、ねえ、姐さん……。」

と、彼の女は振り向きさまに優しく睨んで、

「厭よ。姐さんだなんて……。なんか用……。」

「うん、あのね、お前さんはもうぶつりそんな商賣を止める氣はないかい。」

「さうねえ。外に生きて往けるだけの商賣がありや何時でも止めるわ。」

「さうか。生きて往けさいすりやあきつと止めるね。」

「え、止めるわ。誰がこんな商賣を好き好んでやつてゐるものですかね。」

「うん、そんならね、如何だい。お前さんここに來て、僕達と一緒に働かないか。」

さう云はれるとお鳥は、ちよつとその言葉の意味が分らないと云つたやうな様子で、怪訝さうに訊き直した。

「働くつて……一體どんなことをすりや好いの。」

「なあに、そりやあ働くつて程のことぢやないよ。つまりこの家にあるて飯のことだの何かやつて貰へばそれで好いのさ。」

能島はさう云つてから大川の方を向いて、

「ねえ、大川君。如何だらう、さう云ふことにしては。」

大川はさつきから黙つて二人の話を聞いてゐたが、もとよりこの提議に否やのあらう筈がなかつた。それに彼が昨夜から彼の女に對して感じてゐた同情の念は、もうただかりそのものではない位になつて來てゐた。それだからさう云はれると彼はいくらかほつと顔を赧くしながら答へた。

「え、結構ですとも……。」

さう云つてから大川は、自分の感情を紛らすやうにお鳥の方を向いて、

「如何です、お鳥さん。こんな汚ない家だけれど、あなたは働いて呉れますかね。」

とわざと鄭^{てい}寧^{ねい}な調子で訊いた。

と、お鳥はまた何と思つたか聲を立てて笑つて。

「は、は、は、汚ない家……。汚ない家ならあたしの今ある家の方がどの位汚ないか知れやしないわ。第一住んでゐる人間が汚ないぢやありませんか。」

と云つてから今度は急にしんみりした調子になつた。

「それに引き代へてあなた方は、ほんとに好い人達だわ。あたしはね、今云つたやうな商賣をしてゐるから、自然お客を見判^みけつけてゐるせいで、どんな人だつてそこは一目見ても分るのよ。それだからあたしあなた方を一目^{ひとめ}見た時から、こりやあ好い人達だと直ぐに思つちまつたの。だけど……あたし……ここにゐて働くなんてことは出来ないわ。」

その言葉を聴くと大川は、やゝ思ひ迫つたやうな聲で訊いた。

「如何してさ。何故ここにゐることが出来ないんだい。」

「若しあたしがあすこの家を出て、ここにゐることが知れたなら、あたしは殺されるかも

知れないのですもの。」

さう云ふなり彼の女は突然激しく聲を立てて泣き始めた。

四

「殺される……」能島はびつくりしたやうに云つてから言葉をつづけた。「如何して……誰に殺されるんだ。」

しかしお鳥はこの間には何の返事もせずに、唯黙つて泣きつづけてゐた。袂で顔を蔽つて、喘ぐやうに肩を顫はせて、胸が破れたかと思はれるほど烈しく泣いてゐる女の姿を見てゐると、虐げられたものゝ悲しみが、力強く二人の胸に感じられて來た。

大川は堪らなくなつて、彼の女の肩に手を懸けながら興奮して云つた。

「おい、そんなに泣くことはないよ。誰が來たつて、お前さんを殺させるやうなことはさせやしないから、安心してゐるが好い。きつとおれが救つてやる。指一本だつてお前の體

に觸らせやしないから……。誰が……。どんなことがあつたつて……。お前を殺させて堪るものか。」

が、彼の女は男にちよつとでも手を觸られるのを厭ふやうに、泣きながら體を揺ぶつて、無理に肩に置いた彼の手を外した。そして泣吃逆をしながら途切れ途切れに云つた。

「いいえ、嘘だわ、嘘だわ、誰があたしのやうなものを救つて呉れるもんですか。あたしなんか世間から疾うに見棄てられてゐる人間なんだもの。救つて呉れるなんて……。嘘に極まつてゐるわ。好い人に見えたつて、男はほんとに嘔吐きなんだから……。」

さう云つてしまふとお鳥は、少し落ち着いた様子で、黙つて涙を拭いてゐたが、それでもまだ泣吃逆だけはつづけてゐた。能島は今の彼の女の言葉で、一層憐みを誘はれたやうな顔付で、ちつと彼の女の涙に濡れた横顔を見ながら目をしばたゝいてゐたが、このときやつと彼の女の氣が鎮まつたのを見澄ますと、今度はかなり力強い調子で鋭く訊いた。

「おい、お前さんには僕等がそんなに嘘を吐く男のやうに見えるのかい。」

と、彼の女はちよつと潤んだ目を上げて能島の顔を見ながら、暫時返事に迷つてゐるやうな様子だったが、そのうちかなりはつきりした聲音こはねで答へた。

「いゝえ。若しあたしを救つて呉れるなんてことを云はなければ、あなた方を嘔吐きだとは思はないわ。どうせあたしは救はれない體なんだもの。」

この言葉を聴くと、能島の顔にはちよつと苦笑するやうな表情が浮んだ。

「うん、よろしい。それぢやあそんなことは云はないからここにいるたら如何だ。」

「えゝ。だけど……あたし……。」

「厭だと云ふのかい。」

「いゝえ。あたしほんとにこゝにゐたいんだけど……あなた方まであの人から酷い目に會はされたり何かするとお氣の毒なんですもの。」

能島はこの言葉を聴くと、ちよつと探偵的な興味を呼び起させられたやうに微笑しながら訊いた。

「一體その……あの人つて云ふのは誰なんだね。」

「その人……その人はね、鐵の爪の定吉つて云つて、そりやあ悪い奴なの。」

「それで……如何云ふ譯でそいつがお前を殺さうとしたり何かするんだい。」

大川も傍から口を挟んだ。さうすると彼の女は、馬鹿々々しいことを訊くもんだ、と云つたやうな顔付で、

「分つてゐるぢやないの。つまりその男はあたしに惚れてゐるからなのよ。だからあたしがここにゐるつてことが分ると、きつとまたここにやつて来て、いろいろ亂暴なことをするに極まつてゐるわ。」

「ねえ、先生。そんなことは覺悟の前ぢやありませんか。」

大川が能島の方を向いてかう云ふと、お鳥は不思議さうに能島の顔を見ながら、

「先生つて……一體あなた何の先生なの。」

この問には能島も大川も聲を立て、笑はずにはゐられなかつた。

「は、は、は、何の先生だか當て、御覽……。」

「さうねえ、御醫者様か知ら……。」

「さうさな。或る意味では醫者かも知れない。」

「だけど……。」

と云つて彼の女が何か考へてゐる時、突然表の硝子戸を開ける音がして、一目見て何處か金持の自動車の運転手と思はれるやうな若い男が顔を出した。

「あのう、能島辰雄さんとおつしやる方のお住居はこちらでせうか。」

「え、さうです。何か御用ですか。」

大川がさう返事をする時、その男はちよつと帽子を脱いで頭を下けてから、表の方を振り向いて、

「奥さん、こちらださうです。」

と云つた。

孔雀夫人

—

不意の訪問者——しかも抱への自動車に乗つた貴婦人の訪問者がこんな朝からくるといふことは、能島にも大川にもかなり意外な出来事なのだつた。ところが更に意外なのは、運転手に「奥さん、こちらださうです」と、云はれて、香料の匂を漂^たよはしながら、盛裝をした孔雀のやうな姿で入つて來た夫人は、大川の顔を見るなり突然そこに立ち竦んでしまつた。そして微かに呻くやうに、

「兄さん。あなたもここにいらしたんですか。」

と云つたきり黙つて目と目を見合はしてゐた。この不意の訪問者は、家出をしたきり二

三ヶ月の間、まるで消息の知れなかつた優梨子だつた。

「何だ、何しに來たのだ。ここはお前のやうな女の來るところぢやないぞ。」

大川は暫時すると優梨子の顔を睨み付けるやうにぢつと見据えながらかう云つたが黙つて伏目になつてゐる彼の女の華やかな姿を見ると、また何か不愉快なことを感じたらしく罵るやうに叫んだ。

「さあ出て往け、お前のその装なまを見ただけでも、おれにはお前が今どんな汚きたらしい生活をしてゐるか分るぞ。家出をしたといふ話を聞いた時からおれにはお前の落ちゆく先が大抵察しが附いてゐたんだ。さあ、ここはお前のやうな汚けがらはしい女の來るところぢやない。おとなしく云つて出て往かないと、おれは腕うでづくでもお前をここからつまみ出すぞ。」

大川がさう云ひながら突き出さうとするのを、能島は二人の間に割つて入るやうにして留めた。

「おい、手荒なことをしちやあいかんよ。まあ、待ちたまへ。」

さういつてから優梨子の方を向いて、

「優梨子さん、いづれ何か御用があつてお出でのことと思ひますが……。」

「ええ、實はわたくし今朝の新聞であなたがかういふ事業をお始めになつたといふことを知つたのです。それで及ばずながら事業のお助けをしたいと思つてまゐりましたのですが……。」

優梨子がかういひながら能島の顔を見上げると、能島は眩くらしさうに目を外そらした。

「助けるとおつしやると……如何いふことをなさらうといふんです。」

「少しばかりですが、お金を寄附したいと思つて持つてまゐりましたのですが……。」

「お金を……。」

と云つてからまだ何か云ひ懸けやうとしてゐる時、大川は突然、傍から怒鳴り附けるやうに云つた。

「先生、いけませんよ。そんな金なんぞ斷ことつておしまひなさい。」

と、能島は強く首肯^{うなづ}いて、

「兎に角それだけはお断りしませう。今のところ別にそんなに金の必要も感じてゐませんから……。」

「それでは如何してもお受け下さらないんですか。」

優梨子はちよつと首をかしけながら媚^こびるやうにして訊いた。

「ええ、折角ですがお断りします。」

「しかし、ねえ先生……。」

まだあきらめられないと云つた様子で、何か云ひ懸けやうとするのを、大川は今度は前より一層語氣を荒く怒鳴り付けた。

「おい、何を愚圖々々いつてゐるんだ。用が済んだなら早く歸れ。さあ、さつさところから出て往かないか。」

が、優梨子はまだ黙つてそこに突つ立つてゐた。そしてちよつと白けたやうな短い間を

置いてから顔を上げて、

「兄さん……。何もあたしをそんなに敵か何ぞのやうに云はなくなつて、好いぢやありませんか。」

「しかしお前はまたそんなことを云つて、先生を誘惑しに来たんだらう。」

「誘惑ですつて……。何をくだらない……。」

「くだらないことはない。お前のことだからきつとさうに極まつてゐる。さあ、もう用が済んだんだから、早く歸つたら好いぢやないか。」

「しかし兄さん……。」

「もう兄さんだなんて呼んで呉れるな。おれはお前が森家へ貰はれて往つた時から、もう妹でも何でもないと思つてゐるんだ。あすこの家は、おれ達の父親から見れば敵の家だ。」

「しかしあたしはもうその敵の家から出てしまひました。」

さう云つてゐるうちに彼の女の目からは涙がとめどなく溢れて來た。

大川と優梨子——この二人は可なり數奇な運命に弄ばれてゐる兄妹だつた。

彼等の父は九州でかなり有名な、或る大きな炭礦の持主で、大川隆藏といへばさういつた會社でも、可なり名の賣れた鑛業家の一人だつた。彼は裸一貫の坑夫から成り上がったもので、もとより文字などは多く知らなかつたけれども、しかし頭腦はなまじつか學問のあるものよりもよく働いて、殊に鑛山のことになると、驚く程鋭い直覺力を持つてゐた。それだから彼は、僅かばかりの金で小さな鑛山を買たのを、手始めに、それからそれへ手を擴けて往つて、數年ばかりの間に全く目覺ましいほどの成功をした。そしてその成功と殆んど同時といつても好い位の時に眞吉が生れ、二三年遅れて優梨子が生れた。

しかしかうした華やかな成功の蔭には、早くも怖ろしい呪咀の影が附きまとつてゐた。その呪咀の影といふのは外でもない。坑夫時代から兄弟のやうにしてゐる森彌助といふも

のの心の影がそれなのだつた。彼は大川に先づ女を奪られた恨みがあつた。そしてこの次ぎには彼はまた大川のために、自分の覗つてゐた鑛山を奪られてしまつた。嫉妬、羨望、憤懣——さういつた心持が、胸の中で、ごちやごちやになつた彼は、一時は可なり激昂して、殺さうと思つたりした事もあつたが、しかしさういふことをした結果を考へて見ると、結局自分も牢屋に入らなければならないといふ事に氣付いた。それよりも、もつと巧みな復讐の方法はないだらうか、と思つていろ／＼考へた末、彼の選んだのは、極めて平和なうちに、ぢり／＼復讐の手を延ばしてゆくといふ方法だつた。

怖ろしい森のこの呪咀の影は、だんだん大川隆藏の周圍を暗くし始めた。炭鑛では去年思ひも懸けない浸水の騒ぎがあつたかと思ふと、今年はまだ不圖したことから坑内の瓦斯に火が移つて數百人の人が死んだりした。家庭でも病人は絶へずあるし、主人の大川も酒に酔つて崖から墜ちて大怪我をした。そして數年の後には、いろいろなことが原因で大川は持つてゐた、鑛山もみんな失つてしまへば自分ももう廢人同様の病人になつてしまつて

るた。

森はもうこの時は坑夫を止めて、請負師となつて成功してゐたので、親切めかして優梨子を養女に貰ひ受けたが、森のこの復讐の方法は、極めて巧みに行はれてゐたので、誰もそれと気が付くものがなかつたから、大川もこの舊友の好意を喜んで、その後間もなく何にも知らずに死んでしまつた。

しかし森が誰も知らないと思つてゐる中に、この怖ろしい復讐の企みを密かに知つてゐるものが、たつた二人あつた。それは外でもない、この復讐の手先となつて坑内に水を引いたり火を放つたりする役目を勤めた不死身の安と云ふ男と、もう一人は大川の息子の真吉だつた。不死身の安は森が約束しただけの報酬を呉れないのに憤慨して、密かに真吉にこの秘密を打ち明けたのである。

かうして真吉と優梨子との二人の兄妹は、互ひに敵の家に、敵同志として生きて往かなければならなかつた。優梨子の方からは時々兄のところを訪れることもあつたが、真吉は

その後一度も森の家の鬨を跨がなかつた。今大川が優梨子に向つて、「あすこの家は敵の家だ。」といつたのは、かういふ譯があつたからなのだつた。

かう云ふ二人の數寄な運命を考へると、大川も何となくこの妹をいぢらしく思はずにはゐられなかつた。で、何時までも泣きつゞけてゐる優梨子に向つて、今度は前よりもやさしい調子で云つた。

「さあ、泣いたつて仕方がない。おれはもう何にも云はないから、今日はもうこれで歸つたら如何だ。」

と、優梨子は微かにうなづいて、

「え、歸ります。しかし、あたしはね、あなたが思つてゐらつしやるほど汚れた女ぢやありませんよ。あたしがあすこの家を出てから、どんなことをして來たかと云ふことは、もう直ききつとあなたにも分る時が來るだらうと思ひますから、今は何にも申しません。」

さう云つてから能島の方へ向いて、

「先生……如何も朝からお邪魔に上がつて、失禮してしまいました。折角何とかしてお事業のお助けをしたいと思いますと思つてゐたのに、ほんとうに残念なんですけれど……兎に角今日はお暇でお暇いたしますわ。」

と云ひながらお辭儀をした。そして彼の女はさつきから呆氣に取られたやうな顔付で、この場の様子を眺めてゐた、お鳥にもちよつと挨拶をして、悄然として出て往つてしまつた。

孔雀がなくなると、傷つた鳩のお鳥は、何が可笑しいのか聲を立てて笑つた。

三

優梨子が出て往つてしまふと、暫時黙つてぢつと後を見送つてゐた能島は、不圖氣が付いたやうに大川の方を向いて、

「ねえ、大川君、優梨子さんは一體何をしてゐるんだらう。まるで身装から様子まですつ

かり變つてしまつたぢやないか。」

「ええ、あたしも實はびつくりしてしまつたんです。」と云つてから舌打をして「如何もあいつ……まともな商賣をしてゐるんぢやありませんよ。あんな家へ貰はれて行きやあがつたんで、性根まで腐つちまひやがつたんでさあ。」

と、お鳥はまたちよつと聲を立てて笑ひながら、

「ねえ、だけどあの女は、確かにこの先生に惚れてゐるわよ。それでお金を貢がうつて云ふんでせう。」

さう云はれると能島はまた苦笑をしずにはゐられなかつた。

「は、は、は、君は、君らしい觀察をするね。ところで、お鳥さん……。」
と急に眞顔になつて、

「君は何だらうね。もうそんな厭なところには歸らないだらうね。ここにゐて僕達と一緒に働いて呉れるだらうね。」

お鳥はちよつと考へてゐるが、軽く首肯いて、

「えゝ、それほど御所望ならるて上げるわ。だけどあたしを救つてやらうつて云ふやうなことを考へちやいやよ。あたしは人からそんなことを思はれるのが大嫌ひなの。救ふならあたしは自分で自分を救ふわよ。」

「はゝゝゝ、大變な元氣だね。それぢやあまあ、ここの茶碗や何かを片付けて呉れたまへ。」

お鳥は始めて氣が付いたやうに立ち上がつて、

「ああ、さうさう……今の騒ぎで、あたしすっかり忘れてゐたわ。」

と云ひながら、食べた後の箸や茶碗を片付け始めた。

しかし大川は實の妹の今のやうな姿を見せられると、敵の家へ貰はれて往つた女だとは云へ、さすがにちよつと感傷的な心持にならずにはゐられなかつた。彼は腰掛の上に腰を下ろしたまま、唇を嚙むやうにしてぢつと黙つて考へ込んでゐた。能島も考へ深さうな顔

付で、黙つてぢつと壁に懸けてあるトルストイの深い皺のある額のところを凝視してゐた。

この横町も子供はみんな學校に往つてしまつた後なので、何處かで共用栓の水道の水の音が聞こえるばかり、四邊は不氣味に思はれるほどしんとしてゐた。表の硝子戸にあたつてゐる日射も、妙にしらじらと冷たかつた。

「おい、トルストイつて人は、これで案外優しい顔付をしてゐるなあ。」

能島が突然こんなことを云ひ出したので、大川はちよつと面喰つたやうに顔を上げた。

「ええ、何ですつて……。」

「ううん、トルストイの顔さ。」と云つてから急に調子を變へて、「君は今日もピラ配りに出懸けるかい。」

さうすると大川は急に思ひ出したやうに立ち上がつて、

「さうだ、すっかり忘れてゐましたよ。これからちよつと往つて來ませう。」

と云ひながら隅の棚の上に置いてあつたピラを取り上げて、直ぐにも出て往きさうにし

曉

たが、奥の臺所の方からがちやがちや茶碗などを洗つてゐる音が聞こえて來ると、急に心惹かれたやうに立ち留まつたが、直ぐとまた思ひ返したやうに、

「ぢやあ、先生。往つて來ますよ。」

と云ひ棄てたまま、勢よく硝子戸を開けて出懸けて往つた。

しかし大川は、出懸けて往つたかと思ふと、直ぐにまた一人の十歳とせばかりになる尙僕せむしの子を伴れて引き返して來た。

「先生、この子が何か頼まれて來たつて云ふんですがね……。」

さう能島に云つてから子供の方を向いて、

「おい、何を頼まれて來たんだい。」

「手紙だよ。大事な手紙だから落さないやうに氣を付けて持つて往けつて云はれたの。」

さう云ひながらその尙僕の子は、手に持つてゐる手紙を能島の方へ出した。

「誰だらう。」

と呟くやうに云ひながら受取つた手紙を見ると、それはかなり厚いもので、表面に「能島辰雄様」と宛名が書いてあるぎりで、裏には名前も何も書いてなかつた。が、その字には如何やら見覚えがあるやうな氣がしたので、もう一度怪訝さうにその尙僕の子に向つて訊いた。

「一體お前に頼んだ入つていふのはどんな人なんだね。」

「自動車に乗つた綺麗な女の人だつたよ。お使ひ賃だつて云つてあたいに一圓呉れたの。」

「それぢやあ妹のやつぢやありませんか。まだそこいらに愚圖々々してやがるのか知ら……。」

かう云ひながら出懸けやうとするのを能島は引き留めるやうにして云つた。

「もう往つたつてゐるやしないよ。それよりもまあ兎に角これを開けて見やう。」

封を切つて中の手紙を引き出すと一緒に、百圓紙幣が十枚ばかりばらばらと土間の地面の上に落ちた。

「おや、紙幣が入つてゐるぢやありませんか。」

大川はびつくりしてかう叫びながら、落ち散つてゐる紙幣を拾ひ集めた。

「うん、それぢやあやつぱり如何あつても寄附するつもりなんだな。」

「さうかも知れませぬね。」

と云ひながら大川は拾つた紙幣を數へて見て、

「十枚あるから千圓ですね。千圓と云やあこの不景氣な世の中はかなりに大金だが、如何云ふ氣でこんなことをしやがつたんだらう。まあ、ちよつとこの手紙を讀んで見て下さい。」

さう云はれて能島は始めて氣が付いたやうに、持つてゐた手紙を擴げて見たが、これには唯萬年筆の走り書で、

「これでどうぞ可哀さうな鳩を救つて下さい。」
と書いてあるだけだつた。

「何にも書いてない。たつたこれだけだ。」

その手紙を見ると大川はまた腹立たしさうに舌打ちして、

「仕樣のないやつだなあ。しかしこれは如何しませう。」

さう訊かれると能島もちよつと返事に困つた。

「さうだな、返すにも居所が分らないし……まあ、仕方がない。受取つて置いて孤兒院か何かに寄附をするか……。」

「さうですね、まあ、さういふことにでもするのですかな。兎に角あたしはこの事業しごいの爲にこの金を使ふのは、斷じて厭です。」

「僕も厭だよ。」

「それぢやあ、これはあなたにお預けして置きます。」

「うん、よし……。」

と云つて金を受取つてから、まだそこに佝僂の子があるのに気が付いて、

「ああ、如何も御苦勞さまだつたね。お前の家はこの近所かい。」

「ううん、千束町だよ。」

「さうか、手紙は確かに受取つたからもうお暇り。」

が、この佝僂の子はやつぱ おどく／＼人を怖れるやうな目をしながらそこに突つ立つてゐた。

「如何したんだ。さあ、小父おぢさんも出懸けるから一緒に往かう。」

大川がさう云ふと、その佝僂の子はちよつと首を振つて、

「お使ひ賃をお呉れよ。」

「なんだお使ひ賃はもう貰つたつて云つたぢやあないか。」

「ありやああつちの姉ちゃんから貰つたんだよ。それに千圓のお使ひに一圓ぢやあ安

いや。」

能島はちよつと呆れたやうな顔付で大川と顔を見合せてから、

「よし、それぢやあもう一圓遣らう。」

と云ひながら机の抽斗ひきだしの裏口の中から一圓紙幣を出して、この佝僂の子の手に握らせてやつた。

「さあ、それで好いだらう。一緒に往かう。それぢやあ先生往つて來ます。」

大川はさういひながら慰撫なだめるやうにして、この佝僂の子を伴れて外へ出て往つた。

能島は大川が出て往つてしまふと、トルストイの寫眞の下に置いてある自分の机の前に來て、かなり長い間黙つてぢつと考へてゐたが、暫時するとその椅子に腰を下ろして、もう一度手に持つた紙幣を數へ直してから、机の抽斗の奥の方に收つた。そしてまた暫時落ち着かないやうな様子で、立つて土間の中を歩き廻つたり、椅子に腰を下ろして考へ込んだりしてゐたが、そのうち、何か用を思ひ出したと見えて、急いで二階に上がつて往

つた。

後はまたさつきのやうな、不氣味に思はれる程しんとした静けさがあつた。硝子戸にあつてゐた陽も翳つてしまつて、土間の中にはもう冬らしい寒さが忍び込んで來てゐた。

と、能島が二階へ上がつてから、ものの二三分も過ぎたかと思はれる時分だつた。臺所の方に通ふ戸口からお鳥がそつと忍び足に出て來た。彼の女の顔付はもうさつきとはまるで變つてゐて、すつかり蒼ざめた頬はびく／＼引つ釣るやうに顫へてゐた。そしてそつと蹙音を盗むやうにして、トルストイの寫眞の下の机の傍に近寄ると、音のしないやうに抽斗を開けて、さつき能島が奥の方に收つて置いた紙幣の束を、がたがた慄へる手で摺み出した……。

鐘 曉

罪のさまよひ

一

「さあ、さあ、今度は安來節だよ。好いかい。景氣よくおやりよ。安來千軒名の出た所さ。さあ、もう一枚やらう。そおれ、猪がもう一匹さ。あはははは……。」

「もう酔つてぐでんぐでんになつてゐる女が、摺切れだらけの、古ほけた紙入を帶の間から出して、ぐちやぐちやに押し込んだ紙幣の中から、十圓紙幣を一枚抜いて抛り出すと、そこにある三人連れの藝人のなかの、夫婦者でない方の若い男が周章してそれを拾ひ上げた。もう夜も十二時に近い、少し人が疎らになり懸けた千束町通りの、淺草公園寄りにある源來軒と云ふ小さな支那料理屋で、店の中にもかなり大勢客があるが、女の酔つばらひ

彼の女の罪

鐘 曉

が流しの藝人を呼び込んで何かやらせてゐると云ふので、表は一杯の人ばかりだった。

「さあ、早くおやりつたら……。それで少なきやあまだやるよ。さあ、もう一枚……。」と云ひながら言葉通りもう一枚十圓紙幣を抛り出して、「さあ、早くやれつて云つたらおやりなねえ。」

と、誰だか表に立つて中を覗き込んでゐる見物人の中から頓狂な胴間聲で、

「いよお、紀の國屋あ……」

と云ふものがあつたのでみんな一時に笑ひ崩れたが、藝人達はそれをきつかけに、直ぐがちやがちや三味線を鳴らして、調子はづれの安來節を唄ひ始めた。

胸が悪くなるほど脂あぶらつ臭い店の中には、酒の匂ひや煙草のけむりがあくどく漂つてゐて、何となく棄鉢あひらな空氣が醸し出されてゐるところに、自棄に何かを搔き廻すやうな三味線の響と、ひどく甲高かんたかな唄の聲とが、渦を巻いて流れ始めたのだから、そこはもう何とも言へないほど狂ほしい世界にされてしまつた。電燈の光も妙に黄いろくつてももの凄かつた。

女はさう云つた中にも、まるで自分の家にもゐるやうな落ち着いた様子で、皿や徳利の取り散らされた卓子テブの上に頬杖をついて、目を閉つつてうとうとしてゐるのだが、それでゐて眠つてゐるのでなく、いはば半醉半眠といつたやうな形で、じつと唄を聴いてゐるのかと思ふと、時々目を覺まして面白さうに手を拍たたいたりした。

藝人達は、兎に角思ひ懸けない金を貰つたので、多少薄氣味の悪いやうな思ひをしながらも、かなり長い間唄ひつづけた。と、しまひにはこの店で飲んでゐる客の中からも、酔つて懸け聲を懸けたり、または一緒に聲を合はせて唄つたりする者も出て來た。表にゐる見物人の中からも何とか怒鳴どなつたりするものもあつて、時が経たつにつれて、ここは何ともいへないやうな不思議な光景——「どん底の饗宴」と云つたやうな有様になつて往つた。

しかし女はもうすつかり酔ひ疲れてゐると見えて、ぐつたり椅子に靠もたれたまゝ、時々前に置いてあるコップから酒を呷るだけで黙つて何か考へ込んでゐる様子だった。顔は凄くほど蒼白くなつてしまつてゐて、唇の邊のびくりびくり引つ釣るやうに痙攣けいれんをしてゐるの

囁

が、どんより曇つた電燈の光でもはつきり見えた。

が、女はたつた一人であるのではなかつた。女の卓子デトプの向ひ合せの椅子には、一人の佻儂の男の子が、今にも墜ちさうな格好で腰を懸けて、きよとんとしたやうな顔付で、四邊の様子を見廻はしてゐた。その前には五つも六つも皿や小鉢が並べてあつたが、もうみんな食べ盡くしてしまつたものと見えて、どれももう綺麗きれいに空になつてゐた。佻儂の子は時々思ひ出したやうに小さな聲で、

「姉や、もう往かうよ。」

と云つて促がすけれども、女の耳にはその言葉が聴こえないのか、返事もしらずに黙つてゐた。

そのうちもう安來節も種切れになつたと見えて、藝人達は今度は鴨綠江節あかりよくこうをやり始めた。と、その「朝鮮と支那の境の鴨綠江、流す筏は……」といふ唄の文句が、まだ終るか終らないうちに、女は不圖何を思ひ出したか急にふらふらと椅子から立ち上がつて、

鐘

「ああ、厭だ、厭だ。あんな唄を聴いてゐると死にたくなつちまはあ。」

と獨り言のやうにいつたかと思ふと、今度は例の紙入の中から百圓紙幣を一枚引つ張り出して、卓子デトプの上にぽんと抛り出したなり佻儂の子に、

「さあ新坊、出懸けやう。そしてまた何處かで飲み直さうよ。」

この女はお鳥だつた。そして佻儂の子は彼の女の弟の新吉だつた。

二

お鳥はそこを出ると酔つて危ない足取で、公園の方へ歩いて往つた。そして瓢箪池へうたんいけの前まで來ると、どつちへ往つたら好いだらうと考へるやうな様子で立ち留まつた。

新吉は支那料理屋を出る時から、心配さうな顔付で、お鳥の背後うしろからちよこちよこ小走りこまどりに走るやうしにて躓いて來たが、ここに來て彼の女が立ち留まつたのを見ると、駈け寄つて袂にぶら下がるやうにして聲を懸けた。

彼の女の罪

「姉や、もう歸らうよ。あんまり酔つぱらつて歸ると、またお前酷い目に會はされるよ。」と、お鳥は始めて氣が付いたやうに新吉の方を見下ろしながら、

「ああ、新坊まだるたんだね。お前こそ遅くなると叱られるから、先きにお歸り。姉ちやんはもう、あすこの家には歸らないのだから……。」

新吉はその言葉を聴くとびつくりしたやうにお鳥の顔を見上げた。

「えつ……。歸らない……。如何してだい、姉や。如何してお前、歸らないだなんて云ふんだい。」

しかしお鳥は唇を嚙んだまゝ、黙つてゐた。

「ああ、それぢやあ何かい。お前またあすこの家へ往く氣なのかい。何とか云つたなあ、ああ、鳩の家よ。あすこの家へ……。」

「馬鹿なことをお云ひでない。」と聲高こゝろに云つてから急に四邊を憚るやうに聲を潜めて、

「あすこのお金を盗んで来たんだぢやないか。」

「ああ、それぢやあ今のはあすこのお金……。ありやあおいらが持つて往つたんだぜ。」

「知つてゐるよ。あたしは障子の蔭からそをつと覗いてゐたんだ。」

「それぢやあ、姉や。千圓……。」

と云ひかける口にお鳥は周章しゅうしょうてて手を當てて、

「大きな聲で云ふんぢやないよ。馬鹿だねえ、お前は。」

さう云ひながらお鳥は四邊を見廻はして、幸ひ近くに誰もゐなかつたことを確めると、やつと安心したやうにほつと酒臭い息を吐いた。

もう一時近いので、活動寫眞の小屋も玉乗の小屋もみんな戸を閉めてはゐるが、電燈の光はやつぱり煌々くわくわくと輝いてゐて、それがかへつて深夜のもの寂しさを感じさせた。千束町の通の方は、まだそれでも吉原へ往く人や歸る人で、いくらか人影が見えてゐるが、公園の方に來るともう木の葉の落ちる音が聴こえるほどの静けさで、池の鯉こいの跳ねるのまでが妙に不氣味に耳についた。

二人は暫時黙つて池の水の面に映つてゐる灯影を眺めてゐたが、そのうちお鳥は自分で自分に云ふやうな調子で、

「あああ、如何したら好いだらう。あたしにはもう歸る家なくなつちまつたんだもの。これから先きあたしの往けるところつて云つたら、お墓より外ありやしない。」

と、新吉は傍からそつと囁くやうに云つた。

「お遁けよ、姉や。そのお金で早く何處かへ遁けつちまいよ。それでないとお前、愚圖々々してゐると捕まへられるよ。」

お鳥はその言葉を聴くと、ちよつときくりとした様子だつたが、しかし直ぐ笑ひに紛らしてしまつた。

「はゝゝゝ、大丈夫だよ。遁けたつてやつぱり捕まる時には捕らあね。それよりもお前こそあたしと一緒にゐて、警察へ引つ張られたり何かするといけないから、早く家へ歸つたら如何だい。もう大分夜も遅いし、きつと家ぢやあ心配してゐるよ。」

「うん、おいらは歸ることは歸るがね……姉やもほんとに遁けてお呉れよ。何處か遠くへ遁けつちまやあきつと大丈夫捕まりやあしないよ。ねえ、姉や。さうおしつたら……。」

さう云はれるとお鳥は急に涙ぐんだ聲になつて、

「ああ、それぢやあさうするよ。ねえ、だから安心して家へお歸り……。さうしてね、姉やに逢つたなんてことは誰にも云つちやあいけないよ。」

「大丈夫だよ。そんなこと誰が云ふもんか。」

「これから何處かへ往つちまふと、もう一生逢へないやうなことになつてしまふかも知れないけれど、時々姉やのことは思ひ出してお呉れよ。好いかい。分つたかい。」

「ああ、姉やもね……あんまりお酒を飲まないでね……。」

「ああ……。」

と云つたきりお鳥はもう後の言葉を口に出すことが出来なかつた。涙がほたほたと頬を傳つて流れ落ちた。が、その涙を無理に呑み込むやうにして、

「さあ、もうお歸り。」
と氣強く云ひ棄てたまま、これもしくしく啜り泣しながら袂を握つてゐる新吉の手を振り放して、池の縁の小暗い道を傳法院の方へ歩いて往つた。

お鳥は新吉に別れて一人になると、酒の酔が少し覺めかかつて來ると同時に、急に自分の犯した罪の怖ろしさがひし／＼と胸に徹へて來た。

まるで目に見えない何ものかの手で引き寄せられるやうに、夢現のうちに近付いて往つて、夢中で紙幣の束を握つたままあの家を遁け出して來てからのことは、何だか思ひ出すのも空怖ろしいやうな氣持がしたが、しかしちつと考へてみると、それは如何しても昨日あたりの出來事とは思はれないほど、遠い昔のことのやうにも思はれるのだつた。が、自分がかうして帶の間の紙入の中に、その盗んで來た紙幣を持つてゐる以上は、もうこの罪

は今となつては消すとの出來ない事實なものには違ひなかつた。

「千圓の紙幣束……何とか云ふ露西亞のお爺さんのお爺さんの寫眞……可哀さうな尙樓の弟……酒……酒……酒……鴨綠江節……」

覺めかかつて來たとは云ひながらも、かなり酔つてゐる彼の女の頭の中には、こんな言葉が切れぎれに浮んで來たが、如何してだか昨日あの家を遁け出してからのことは、何だかほんやりと濃い霧に隔てられてゐるやうで、如何してもはつきり思ひ出せなかつた。で、彼の女はもう一度自分の胸に問ひかけて見た。

「それぢやお前は、昨夜何處に泊つたんだい。」

と、不圖彼の女の目に浮んで來たのは、吉原の或る汚ない小店の女郎屋の光景だつた。そこには白粉を班らに塗り立てた、この世のものとも思はれないやうな七八人の女が、鍋や皿を取り圍んで、さながら餓鬼地獄のやうに食べものを争つてゐた。中には正體もなく酒に酔つてしまつて、何だか知れない甚句のやうな唄を、聲をかぎりになつてゐるものが

あるかと思ふと、指の先まで眞つ赤に酔つて、何が可笑しいのかひとりで聲を立て、轉けるやうにして笑つてゐるものもあつた。そして彼の女自身はと云へば、さういふ座敷の眞ん中に、女だてらに胡座をかいて、コップで酒を呷りながら、何かしきりに大きなことを喋つてゐた。

昨夜の泊つたところが何所だかといふことを思ひ出すと、ひとりでにその前後のことは手繰り出すやうに分つて來た。彼の女は金を盗んであの「鳩の家」を遁け出してから、直ぐにその足で公園に往つて、不斷から大好きな活動寫眞を觀に入らうとしたのだが、百圓紙幣では剩錢がないといはれて、それを崩すために廣小路の或る鳥屋に上がった。そしてそこでちよつと形容だけに飲むつもりだつた酒を、つい一杯二杯と飲み過ぎしてしまつて、しまひにはもうすつかり腰を据えて夕方まで飲み續けた。で、酔つて氣が大きくなつて來ると、盗んで來た金だと云ふことも忘れて、千圓の紙幣束を見せびらかすやうに出して、女中から下足番にまで纏頭を遣つてから、好い心持になつてその家を出たのだつた。

が、外へ出たところで別に往くところもなかつたから、彼の女はまたさつきの活動寫眞に入らうとしたことを思ひ出して、公園の方へ往く路次を通り抜けて、活動寫眞館の並んだ賑やかな通りを、人波に揉まれながら歩いて往つた。しかしかう酔つてしまつてゐると、もうさつきのやうに觀たいといふ心も起らなかつたが、それでも地下室のやうなところで美しい女が惡漢に拳銃を突き付けて脅迫をされてゐる、と云つたやうな刺戟の多い繪看板などと見ると、ひとりでに足を留めずにはゐられなかつた。そこで到頭彼の女はもうすつと十二階の方に近い、玉乗の小屋の直ぐ隣りにある〇〇館の前に来て、「女の呪ひ」と赤地に白く染め抜いた旗が下がつてゐるのを見ると、もう堪らなくなつて切符を買つて中に入つた。中に入るとつい面白いのでお終ひまで見て、それからまた二三軒飲み歩いてから正體もなく酔つて吉原へ往つてそこに泊つたのだつた。

「今朝あすこを出てから如何したのだらう。」

さう心の中で呟きながら考へて見たが、何だかそこだけほかんと穴が開いてゐるやうに

記憶が失はれてゐて、如何しても思ひ出すことが出来なかつた。兎に角何處かであの可哀さうな不具者かたぢものの弟に出會つたのには違ひないが、それが一體如何して出會つたのだから、彼の女の心の中からは、それを思ひ出す端緒いとぐちさへも見付からなかつた。思ひ出されないとすると、何だか自分の心に罅隙ひびきが入つたやうな氣がして、何だか急にもの寂しくなつて來ると同時に、犯した罪の怖ろしさが、またひしく胸に徹へて來た。

「畜生……。如何ともなりやがれ……。」

お鳥は無理にその寂しさ怖ろしさを自分の心から突き放すやうに、かう誰に向つて云ふともなく叫んでから、不圖目の前に汚らしいおでん屋の屋臺があるのを見ると、またむらくと酒が飲みたくなつて、突然暖簾のれんから首を突つ込むなり叫んだ。

「おい、お爺おぢつあん。熱いのを一本つけてお呉んな。」

四

そこはもう傳法院の横町に曲つてからのところだつた。この頃の不景氣に客もないと見えて、もう六十位になるおでん屋の爺は、不精ぶせうたらしく座り込んだまゝ、うとく居眠りをしてゐるところだつたが、この聲を聴くと、びつくりして髯だらけの顔を上げた。

「へい、いらつしやいます。お酒は並なまのに致しますか、正まに致しますか。」

「極つてらあね、正宗だよ。」

さう云つてからお鳥はもやもや煙の上がつてる鍋の中を覗き込んで、

「それからね、お爺おぢつあん。そのすぢとちくわのよく染みてゐるやうなところをお呉んな。」

お鳥はかうしてまたこのおでん屋で飲み始めたが、今度は如何してだかもうさつきのやうに酔が體に廻らなかつた。

「ねえ、お爺おぢつあん。この正宗は一體何正宗なの。厭にかう水つほくてこくがないぢやないか。」

「へえ、そんな筈はありませんがね。屋臺はこんな屋臺だけれど、酒だけはあつしも飲む口だもんですから、かなり吟味してあるんですが……。」

「さうかねえ。何だかいくら飲んでもちつとも酔はないし……妙に頼りない舌觸りだよ。」

「そりやあ、姐さん。あなたの口のせいですよ。」

「さうかねえ。」と云つてからちよつと舌打をして、「こんな水つほい酒を飲むのに、こんなものでは面倒臭いや。ねえ、お爺つあん。その湯呑を借してお呉れな。」

湯呑で飲み始めると、少しは酔が廻つて來たので、だんだんさつきまで感じてゐた寂しさや怖ろしさも忘れられて往つた。

「は、ムムム、やつぱり酒を飲むと、だんだん面白くなつて來るから不思議なものさね。ねえ、お爺つあん。お前さんも一杯これで附き合はないかい。」

「へえ、如何も難有うございます。しかしあつしはもうさつきから、お客がねえのと寒いので、自棄酒やけざけつてほどのものでもありませんが、内所でちびちび飲つてゐましたから、

もうこれ以上は頂けません。」

「だけど……好いぢやないか、お爺つあん。思おもひ差さだよ。あたしやお前さんのその髻に惚れたよ。」

「ご笑談を……。まあ、お酌をさせて頂きませう。」

「はははは、お爺つあん。中々味をやるね。」

「へへへへ……。」

爺が髻だらけの顔に薄笑ひを浮かべながら、波々と注いだ湯呑の酒を、お鳥はぐうつと一息に飲み乾してから、

「ああ、甘い。お爺つあん。後のはもうついてゐるだらう。」

と、そこへ「今晚は」と云ひながら暖簾を分けて一人の男が入つて來た。ちよつと見たところ商人のやうな身装みなりをした三十恰好の男で鳥打帽を眞深まぶに被つてゐたが、入るなりちろりとお鳥の方を見て、それから改めて爺の方を向いて、

「お銚子を一本つけて貰はうかね。」と落着いた調子で云つた。

お鳥はもうこの時分には、湯呑で飲んだ酒が廻るにつれて、昨日からの酔が一時に出て来て、もう少し呂律が廻らない位に酔つてゐたのでこの男が入つて来ると好い相手が見付かつたと云つた様子で、湯呑をこの男の前に差しながら云つた。

「ねえ、旦那。お燗が出来るまでの口ふさぎに、この湯呑を受けて頂戴……。」

「いや、こりや如何にも……。姐さんのお盃を受けたりなんかすると誰かに叱られやしませんかい。」

「大丈夫ですよ。あたしのやうな飲んだくれの女にやあ、誰が關つて呉れるもんですか。」

「さうかね……。」男の目はぎろりと鋭く光つた。「關つて呉れる男もないのによく百圓紙幣がばつぱつと使へるね。」

「ええ……。」

とお鳥が叫ぶやうに云つて遁け出さうとした時はもう遅かつた。男の手はもう堅くお鳥

の手を掴んでゐた。

「太え阿魔だ……。さあおれと一緒に来い……。」

その男はさつきお鳥が支那料理屋を出る時から、ずつと見え隠れに後を跟けてゐた象瀉署の刑事だつたのである。

救ひの手

二三間前に垂れてゐた、けばけばしいがもうかなり汚れた、真紅の色の繻子の幕が、鈴の音につれてきりきりと巻き上がると、彼の女の目には、土間も棧敷も一面にぎつしりと詰まつた観客の頭や顔が、ひどく異様なもののやうに映つて來ると同時に、生温かい人いされが、むつとするほど激しく鼻を打つた。が、しかし幕が上がつて観客の顔が見えると、もう直ぐに一種の舞臺の上の習慣から、子供の時から長年云ひ馴れてゐる口上の言葉が、すらすら流れるやうに咽喉から出て來た。

「お目まだるうはございませうが、太夫身仕度を調へをります間、ちよつと二つ三つカア

下の奇術を御覽に入れました上、坊ちやんのお土産に、種を明かして御覽に入れます。」

「坊ちやん嬢ちやん」と云ふ度に、何時何處でも観客がどつと笑ひ崩れるのは、彼の女がさういふ言葉を云ふにしては、あんまり子供で可愛らしいからであらう。しかし彼の女は笑はれることなどは何時ものことなので、關はず手に持ったカードを観客の方へ差し出すやうにして、先づ最初の小奇術を演りはじめる……。

「ここに三枚のトランプのカードがございます。」

と云ひながら、不圖手に持つてゐるものを見ると——それが如何だらう、何時の間にか、みんな百圓紙幣と變つてゐるではないか、百圓紙幣——あの盗んで來た百圓紙幣と。

「おや……。」と思つてゐるうちに観客の方でも、それがカードでなくつて紙幣だといふことに氣が付いたと見えて、

「トランプぢやあねえ、紙幣だぞ。」

「何だ。呉れるつて云ふのか。」

などと彼方からも此方からも叫ぶものなぞがあつたので、これには彼の女もすっかり面喰つてしまつて、それつきり黙つて唯ほんやり舞臺の上に突つ立つてゐると、唯だか傍に來て突然びしりと横頬をひとつ毆つてから、

「太え阿魔だ。さあ、來い。」

と嚇すやうな調子で云ふものがあつた。

と、もう次ぎの瞬間には、彼の女は軽々とその男の腕に抱き擁へられて、何處とも知れない眞つ暗な夜の闇の中を走つてゐた。が、二三町往つたかと思ふうちに、彼の女は何時之間にかもう昏睡したやうな心持になつて、四邊がだんだん落ち込んでゆくやうに思はれて來た。

……氣が付いて見ると、もう何時の間にか場面がすっかり變つてゐて、彼の女は何時だかの朝のやうに、あの「鳩の家」と云ふ救世軍のやうな家の土間の隅の腰掛の上で、いぎたなく眠りこけてゐるのだつた。が、しかし、ここが果してあの家だか如何だか彼の女に

はまだよく判らなかつた。或ひはあの家によく似た家かも知れなかつた。

「おや、如何したつて云ふのだらう。さつきまで舞臺に立つてゐたのに……。」

彼の女は心の中でこんなことを呟きながら起き上がらうとしたが、何だか體中鉛でも背負はされたやうに、慵いやうな重さが感じられて、ちよつと手足を動かすことも中々容易なことではなかつた。で、仕方がなしに諦めたやうな心持になつて、ぢつと横になつたまま目を閉つてゐると、誰だか枕頭から少し離れたところで、話し合つてゐるものがあると見えて、聴き覚えのある聲が彼の女の耳にひびいて來た。

「それだからよ。もうかうなつちやあ隠してもゐられねえから、お前が兄だつてことを、關はず打ち明けてしまつたら好いちやあねえか。」

さう云つてゐる聲は、まさしくあの母の情夫で、後では自分と戀に落ちた秋山と云ふ、自轉車の曲乗をやる男の聲に違ひなかつた。

「うん、しかし、今更兄妹名告り合つたところで仕方がないからな。」

その聲はよく判らなかつたが、あの「鳩の家」の先生の聲のやうにも思へたし、或ひはまたやつぱりあの家にゐた、もう一人の青い職工服を着た男の聲のやうにも思へた。

これつきりもう話し聲は聴こえて來なかつたが、しかしこれだけの言葉を聴いただけでも、もう彼の女の胸は、嬉しさとも悲しさともつかないやうな、妙に思ひ迫つたやうな心持で一杯になつた。暗黒の寂しい路を辿つて往かなければならない、私生兒と云ふ悲しい烙印を額に捺された暗黒の子に取つて、新しい兄が見付かつたと云ふことは、どんなに喜ばしいことであらう。不具の第一人しかない頼りない身に、たとへ父が異つたにしても兄がある……。と、彼の女はもう堪らなくなつて、大きな聲で、

「兄さん……。」

と叫んだのだが……。

その聲でお鳥は不圖目を覺まして見ると、そこはこれまで二三度來たことがあるので覺えがある象潟署の留置場で、太い格子の間からは、もう曉の光が青白く流れ込んで來て

ゐた。

「何だ、夢かい。馬鹿々々しい。」

お鳥はかう吐き出すやうに呟いてから、酒臭い嘔をふうつと漏らした。

二

お鳥は暫時さうやつてぢつと何か考へ込んでゐたが、そのうち不圖氣が付いたやうに、首を擡げて、檻の中を一順ぐるりと見廻はして見た。が、そこにはその晩に限つて珍らしく彼の女一人だつた。

「これまでここに來た時は、きつと同じ商賣の可哀さうな女が五六人は打ち込まれてゐたものだが……。」

と思ふと、何だかちよつと寂しいやうな氣もしたが、しかし一人だと分ると、結句何と云ふ譯もなしに、ひどく呑氣な身になつたやうな氣がして、何時の間にか犯した罪の

恐ろしさなぞも忘れられた。で、今まで見てゐた夢の後を追ふやうな心持で、眠るともなしにうとうとしてゐるが、そのうちがちやがちやものしい響を立てて、入口の錠を外してから戸を押し開けて、誰か中に入つて来たかと思ふと、何處か暖味のある錆びたやうな聲で、

「おい、お鳥。今度はお前大變なことをしたつて云ふぢやないか。とても、何だぞ、今度は拘留位ぢやあ濟まされないぞ。」

と云ふのが聴こえた。

が、お鳥はわざとふて臭れて、ぐつすり眠つた振りをしていると、男は直ぐにそれを感じ付いたと見えて、

「おい、駄目だよ。眠た振なんぞしたつて……。さあ、起きて飯でも食つたら如何だ。さういつもおれ達に世話ばかり焼かせるもんぢやあないよ。」

と云つたが、お鳥にはその聲とその調子とで、やつとそれがお鳥のやうな魔窟にゐる女

達から、親切なので「佛様」と云ふ渾名を付けられてゐる藤本と云ふ、もう五十近い老刑事だと云ふことが分つた。さう分るとお鳥は顔を上げずにはゐられなかつた。

「ああ、咽喉が乾いて仕方がないわ。お水を一杯呉れないこと。」

「うん、やつても好いが……。それよりもお前、今度は如何したつて云ふんだ。飛んでもねえことをするぢやあねえか。しかしお前不思議なことにやあ何處からも盜難届が出てゐないつて云ふぜ。」

「えつ、盜難届が出てゐない……。そんな善はないよ。」

と云つてから何か思ひ出さうとするやうに、

「しかし、あたし昨夜はどんなことを喋つたんだらう。」

お鳥は傳法院横町の汚ないおでん屋で、ぬつと入つて来た刑事のために、突然手首を押へられて、もう遁けるにも遁けられなかつた時のことだけは、今でもはつきり覚えてゐるが、その前後のことになると、何だかほおつと霞んだやうになつてしまつて、唯斷片的な

映像が彼の女の目の前を通り過ぎるばかりだった。

「だつてあたい昨夜すっかり白状しちゃつたんでせう。」

お鳥がさう云つて訊くと、老刑事は笑ひながら點頭うなづいて、

「うん、酔つばらいてものは正直なものだよ。こつちで訊かないことまですっかり喋つちまつたからな。おい、秋山つて云ふのは一體何だい。」

「秋山……あら、厭だ。そんなことまで喋つちまつたの。」

お鳥は初心らしく耳の附根まで眞つ赤にしてしまつた。

「馬鹿たねえ。あんなやつのことまで喋るなんて……。あのね、秋山つて云ふのはね、あたいを棄てて遁けた男よ。あたいがこんなになつたのは、みんなそいつのためなんだわ。」

「道理で、ひどく昨夜もその男のことを恨んでゐたつけ。」

と云つて考刑事は暫時ちつとお鳥の顔を凝視みつめてゐたが、今度は急に冷たく鋭い調子になつて、

「だがなあ、お鳥。お前はまさか昨夜嘘を吐いたんぢやあなからうなあ。兎に角千兩つて金を盗まれてゐるのに、盗難届が出てゐねえつて云ふのも變な話ぢやあないか。何だぞ、嘘を吐いたり何かすると爲にならねえぞ。好いか。今日これから調べがある筈だから、その時は嘘なんか吐かずに、もうすっかり度胸を据えて白状しなくちやいけねえぞ。さうすりやあいくらか情狀酌量つてこともあるからな。」

お鳥の耳には、かう云ふ老刑事の聲が、今朝けさにかぎつてひどく身に染むやうに思はれたので、黙つてぢつとその言葉に聴き入つてゐるうちに、ひとりで目の中がだんだん熱くなつて來るのを感じた。

「ええ、あたい嘘なんぞ吐きやしないわ。今のやうな商賣をしてゐるよりも、監獄に往つた方が、どの位幸福しあはせだか知れやしないんだもの。あたいもう正直に白状して、早く監獄にやつて貰ふわ。ほんとにあたいなんかこんな世の中に生れて來ない方がよつほど好かつたんだ……よつほど好かつたんだ……。」

かう云ふお鳥の目からは、燃えるやうに熱い涙がほたく／＼落ちた。老刑事の目にも涙が微かに光つてゐた。

と、その時昨夜お鳥を捕へた北島と云ふ刑事が、戸口のところからぬつと顔を出して怒鳴るやうに云つた。

「何だ。泣いてやがるのか。哀れつほく持ち懸けやがるねえ。さあ、藤本君。そいつを部屋へ引つ張つて來たまへ。」

かうしてお鳥は刑事部屋へ伴れて往かれた。

お鳥は何しろ無暗に飲み續けた揚句なので、頭はがん割れるやうに痛むし、咽喉はひりひり焼け付くやうに乾いて、折角取つて呉れた井も見ただけでも胸がむかむかした。で、箸も取らずにほんやり座つてゐると、例の「佛様」といふ渾名の藤本といふ老刑

三

事は、

「如何したんだい。食べないのかい。何處か悪いかね。」

と云ふやうな言葉を懸けたが、もう一人の北島といふ若い刑事は、唯黙つて何か探り出さうとするやうな冷たい視線を、彼の女の横顔に投げかけてゐた。みんな他の刑事達は、何處かへ往つてゐると見えて、この刑事部屋の中には、お鳥とこの二人の刑事がゐるだけだつた。入口の扉は堅く閉め切つてあるので、この一間だけは妙に薄ら寒いほどしんとしてゐた。

と、暫時経つと北島は、急にお鳥の方に向き直つたかと思ふと、きつと睨むやうに見据えながら、

「なあ、おい。お前は昨夜あの百圓紙幣を何處で盗んで來たとか云つてゐるなあ。」
と何處か探るやうな調子で訊き始めた。

「ああ、あれ……。あれはあたい……。あのう……。何とか云つたなあ……。ほら……。馬道のと

ころの救世軍見たいなことをしてゐる家があるでせう。あそこで盗つたの。」

お鳥がさういふと北島はもどかしさうに舌打をして、

「分らねえな。救世軍見たいなことをしてゐる家つて、一體何なんだい。」

「何だか知らないわ。變な家よ。元何とかいつた西洋料理屋の跡で……何とか云つたけなあ……ああ、さう、さう……鳩の家つて云ふ家なの。」

「鳩の家……。」

刑事は不思議さうに訊き返した。

「ええ、たしかさう云つたわ。そりやあ汚ない家なのよ。入ると直ぐ土間があつて、その壁にやあね、變な怖い顔をした、目のいやに窪んだお爺さんの寫真が懸けてあるの。何とかいふ露西亞の人なんだつて……。」

「露西亞」と聴くと、直ぐ過激派を聯想したやうなぎよつとした顔付で、

「露西亞……誰だい、その寫真の人は。」

「知らないわ、誰だか……。變なお爺さんなんだもの。」

「ふうん……。」と云つたなり刑事がすつかり考へ込んでしまつたので、そこには前よりも一層薄ら寒いやうなしんとした閑けさがあるばかりだつた。

と、暫時経つと北島といふ刑事はやつと首を上げて、

「ねえ、藤本君。君はその家の當りは附かないかい。」

それまで藤本といふ老刑事は、黙つて煙草ばかり喫んでゐたが、さう訊かれると始めて北島の方を向いて、

「知つてゐるよ。一時社會主義ぢやないかつて云つて目を附けた、あの赤ペンキ塗りの妙な家さ。」

「何だい、あの家か。君も人が悪いぢやないか。知つてゐる癖に黙つてゐるなんて……。しかし、變だなあ。あの家に百圓紙幣で千圓つてものがありつこないやうな氣がするんだがなあ。」

と眩くやうにいつてから、また鋭く詰るやうな調子で、

「おい、お鳥。お前まさか出鱈目を云つてゐるんぢやないだらうな。出鱈目を云つて、おれ達に餘計な手数を懸けて見ろ。ほんとに今度こそ承知しやしねえから……。」

さういふ刑事の顔をお鳥は馬鹿々々しいと云つたやうな眼差まなざしで見てるたが、暫時経つとふふんと鼻の先で軽く嘲けるやうに笑つた。

「ほんとにお前さん達は如何してかう疑り深いんだらうねえ。眞實ほんとのことを云へば嘘だつて云ふし……そんなら嘘ばかり云つてゐりやあ、お前さん達はみんな眞實だと思ふのかさ。」

「何を云つてゐるやがるんだい。眞實のことを云ふ柄かい。嘘に極つてゐるぢやねえか。第一千圓といふ大金を盗まれてゐるのに、警察へ何とも沙汰なしだし……。何だな。お前はそんなことを云つておれ達に嘲弄からげひやがるんだな。」

と云つて立ち懸けやうとするのを、藤本は傍から引き留めながら云つた。

「まあ、まあ、好いぢやあないか。それよりもひとつその鳩の家つて云ふ家へ往つて、果して盗まれたか盗まれなにか調べて來たら好いぢやあないか。この女はおれがここにゐて見張つてゐるから逃走すたがらせるやうなことはしやしねえよ。」

「うん、それもさうだな。ぢやあ頼むよ。」

さう云ひながら若い刑事は、慌わづただしくこの薄暗い部屋から出懸けて往つた。

四

お鳥はそれから幾時間眠つたらう。お鳥自身には二三日寢續けたかと思はれたほどぐつすり眠つたが、しかしそれはほんとのところ一二時間位なものだつたと見えて、覺さめ際の夢現のうちに時計が十時を打つのを聞いた。一旦目が覺めて見ると、出たり入つたりする刑事達の話し聲や足音も騒がしく耳について、もう睡りに落ちることも出来なかつたが、しかしかうしてあの老刑事から借りた毛布を被かつて寢てゐると、自分が恐ろしい罪人だと

いふことも忘れられて、少女時代の美しい思ひ出が胸に蘇つて来た……。

あれは何處だつたらう。街盡頭まちぼろの入江の傍の芝つ原に小屋掛がしてあつて、一座の者は大抵そこに泊り込んでゐた。夏のはじめで、空には雲雀ひばりの囀りが聴こえ、海の風がすがすがしく吹いてゐたから、興行の始まらない午前のうちには、そこいらの草の上で遊んでゐると、かういつた旅藝人の一座にゐるといふことも忘れられて、やつぱり普通に育つた少女のやうな楽しさが感じられた。あの時入江を出てゆく白帆の数を数へつこをしたり、雲雀の巢を捜しに往つたりした、あたしの遊び相手に、わざと支那人らしい李鳳リフウと云ふ藝名を附けられた曲藝をやる男の子があつたが、あの子などは今如何してゐるだらう。

それからこれもあの時分のことに違ひない。一座に犬を使つていろいろの藝をさせる男がゐるが、その男の使ふ犬の中に一匹、それはそれは可愛らしい犬があつた。ルカと云ふ妙な名前の露西亞種の犬で、何でも神戸で外國人から買ったものだといふことだつたが、この犬がまたあたしの遊び相手で、いつも夜になると、よくこの犬と抱だき合つて寝た。母

はあたしを生んだだけで、まるで育てると云ふことなどは知らない人だつたから、あたしは夜いつも一人で寝かされてゐたのだが、そのあたしの子供の時分の寂しさは、どの位このルカと云ふ犬のために慰められたか知れなかつた。藝をさせても巧かつたし、白いらるに茶色の斑そばのある、毛並の美しい好い犬だつたが、あの犬なども今はもう死んでしまつたらう。

こんなことを考へてゐると、ひとりでに心が和なんで来て、もうさつきのやうな頭の痛みと咽喉の乾きも感じられなかつた。そしてその代りには何か軟かい綿でも包まれたやうな疲労が、體一體押し被かさるやうに感じられて来た。

と、またうとうと睡りかけさうになつたが、目の前にちらちら何か舞つてゐるやうな幻を見てゐるうちに、お鳥は急に被つてゐた毛布を引き捲めくられて、肩を一ゆすり揺られたかと思ふと、

「おい、起きろ。」

と怒鳴り付けるやうな聲のために呼び覺さまされた。

見るとそこにはさつき出て往つた北島といふ刑事が立つてゐて、お鳥が起き上がるのを見るなり怒つたやうな調子で、

「おい、お前の云ふのはやつぱりみんな嘘だつたぢやないか。今往つて聽いて見れば金なんか盗まれやしないといふ話だ。」

と云つてから背後うしろの方を向いて、

「ねえ、盗まれたなんて嘘なんぞでせう。」

と確めるやうに云つた。そこには、あの家で「先生」といはれてゐる能島が、何となく蒼ざめたやうな顔付で、項垂うなれたやうな恰好で突つ立つてゐた。

「あつ、先生……。」

お鳥は能島の顔を見るなりびつくりしたやうにかう叫んで、思はず立ち上がつて遁けやうとしたが、それは手もなく北島といふ刑事のためにその場へ引き据えられてしまつた。

「何だ。遁けやうたつて遁がすものか。さあ、あそこで盗んだのが嘘と極つたら、一體お前はあの金を何處で盗んで來たのだ。さあ、今度こそ眞實のことを云つてしまへ。」

が、お鳥は黙つてゐた。ぢつとそこに引き据えられたまま、破れやしないかと思はれるほど堅く唇を噛んで、死んだもののやうになつてゐた。お鳥には見す見す自分が千圓盗んでゐると云ふことを知つてゐながら、何處までも盗まれなないと云ひ張つてゐる能島と云ふ男の心が分らなかつた。

「それが分るまで黙つてゐやう。」

お鳥はさう心に決めたのだつた。

と、お鳥があんまり黙つてゐるので、刑事がまた何か云ひ懸けやうとした刹那せつなだつた。能島はつかつかと前に出て來たかと思ふと、突然お鳥の手を堅く掴んでゐる刑事の手を、徐じゆかに振り離しながら云つた。

「いや、嘘を吐いてゐるのは僕なのです。實はあの千圓の金は、僕からこの女に與つたも

第二編
迷へる人々

鐘 曉

のなのです。あの金は断じてこの女の盗んだものぢやありませんよ。」

刑事は哑然として能島の顔を凝視めた。

お鳥は生れてから始めて、彼の女の方に差し伸べられる、神のやうに優しい手があるのを見た。

戀と友情

鐘 晩

大川眞吉はお鳥の姿が、あの千圓の紙幣きつたばと一緒に、この「鳩の家」から消えてしまふと、急に何だか四邊が暗くなつたやうに思はれてならなかつた。その前夜能島が講話をしてゐる最中に、女だてらにぐでんぐでんに酔つ拂つて入つて來た、だらしない姿を見た時には、何だか厭いやらしい氣持がして、この家までが汚されたやうにも思はれたが、しかしその翌朝いぎたなく眠つてゐる女の姿を見ると、何となく憐憫あはれみの情が感ぜられて、ひどくこの女がいぢらしくなつた。そして一緒に朝飯を食べたり、可哀さうな身の上話を聞いたりしてゐるうちに、だんぐ彼の胸の中には、戀と云へる位の極く微かな情の芽が崩え出し

て來てゐた……

しかし大川が自分でそのことを——彼が彼の女を戀してゐると云ふことを、自分自身に明らかに感じたのは、お鳥の姿がこの家の中から、忽然と消えてしまつてからのことであつた。無論机の抽斗ひきだしの奥に入れてあつた優梨子から届けて寄越した千圓紙幣が、それと同時に見失はれてゐたので、直ぐに彼の女がそれを盗んで遁けたと云ふことが分つたけれども、それでも彼は罪人として彼の女を憎む氣にはなれなかつた。

ピラ配りから歸つて來て、硝子戸を開けて土間に入ると、能島はトルストイの額の下のの机の前で、目を閉ぢたまゝ腕を組んで考へてゐるが、大川の顔を見るなり待ち構へてゐたやうに訊いた。

「君は何處かであのお鳥つて女に會はなかつたかね。」

「いゝえ。會ひませんでしたよ、あの女が如何かしたんですか。」

さう云ふと能島は悲しさうに點頭いて、

迷へる人々

「あゝ何處かへ往つてしまつたらしいよ。」

「えつ、何處かへ……。しかしまた直き歸つて來るんでせう。」

と能島は一層悲しさうな顔付になつて、首を振りながら云つた。

「いゝや。おそらくはもう歸つて來ないだらうよ。何しろ唯往つてしまつたんぢやあないんだからね。さつきあの佝僂の子が屈けて來た千圓の金を盗んで往つてしまつたんだからね。」

「あゝ、あの千圓の金を……。」

大川の目には、直ぐに囚人としてのお鳥の姿が傷ましく浮んだ……。

「しかし、ねえ君。僕はよくあの女があの金を盗んで呉れたと思つて、實は今感謝したいやうな氣持になつてゐたところなんだよ。考へても見たまへ、あの金がこの机の抽斗の中に何時までもあつたとした場合を……。僕はあの金のためにどの位不愉快な、そしてまた面倒臭い、心の負擔をしなければならぬか知れなかつたのだぜ。如何だね、君。この金

を持つて往つて呉れたんだから。僕は充分あの女に、感謝するだけの値打はあると思ふんだが……。」

大川は能島のその言葉を聽くと、何となく彼自身が救はれたやうな氣がして、はつと太息を吐くと同時に訊いた。

「それでは、先生。あなたはあの女を訴へはなさらないつもりなんですかね。」

「當り前さ。この場合訴へるなんてことは、恩に報ゆるに仇を以てするやうなもんぢやないか。」

「さうです。あの女はきつと私達のためにあの金を……優梨子のやつが屈けて寄越しやつたあの金を、盗んで往つたのに違ひありませんよ。」

大川が激したやうな吃り調子でかう云ふと、能島も深く點頭いて、

「さうだよ。それだから僕は、若しあの女が大金を持つてゐると云ふやうなことから嫌疑を受けて、警察に捕へられたやうな場合があつたら、如何にかして救つてやらうと思つて

みるんだ。」

「先生。どうぞ救つてやつて下さい。あの女はほんとに可哀さうな女なんですから……。」
かうして大川はその日お鳥が金を盗んで遁けたと云ふことを知つたのだつたから、もうその話を聞いた時から既に、彼の女を憎むどころではなく、むしろ憐憫と同情とで、胸を一杯にされてゐたのだつた……。

その日も、その翌日も、大川の胸からは如何してもお鳥のことが離れなかつた。たつた一晚——それもこの土間の腰掛の上で泊つて往つた女だつたけれども、大川はこの家の中に彼の女の姿を見ないことに、激しい寂寞を感じてゐた。

「先生。如何しましたらう、あの女は。」

思はずそんなことを能島に向つて訊きかけることもあつたが、その時大川の顔には、明らかに戀するものゝ悩みが現はれてゐた。

二

お鳥が象潟警察署の刑事に捕まへられたと云ふことが分つたのは、彼の女が遁けた翌々日の朝のことだつた。

大川はその前の晩、かなり遅くまで能島といろ／＼の話をしてから寢たので、すつかり寢そびれてしまつたと見えて、床の中に入つてからも、痛いほど目が冴えて眠付かれなかつた。さうするとその冴えた彼の目には、お鳥の姿がまざ／＼と映つた……。

「今あの女は如何してゐるだらう。あんな装をして、千圓の紙幣束を持つてゐるといふことが分つたら、直ぐ捕はれてしまふのに極つてゐる……。」

さう思つて悲しさうに目を閉ると、怖ろしいほど長く續いた、高い灰色の監獄の壁や、編笠を被つて手錠を穿められて、珠數繫ぎにされた囚人の列や、そんなものがまるで映畫でも見てゐるやうに、すらく／＼と目の前を通り過ぎて往つたが、そのうちだん／＼目が霞

むやうにほおつと曇つて來ると、何時の間にか涙が冷たく頬を濡らしてゐた。

が、そのうちに睡りに落ちてしまつたものと見えて、目を覺まして見ると、曉の青白い光が割目だらけの雨戸の隙間から差し込んで來てゐた。それが眠足りない彼の目には、ちか／＼と刺すやうに映つたので、またうつとり目を閉つたが、不圖隣りの家から聞こえて來る時計の音が入ると、これがもう八時だつたので、びつくりして寢床から起き上がった。雨戸を開けて見るとそれはどんより曇つた日で、空にはまだ曉闇のやうな仄暗さが残つてゐた。

と、彼が起きると間もなくのことだつた。表の硝子戸を荒々しく敲くもの音がしたと思ふと、誰だか分らないがひどく權柄づくな男の濁聲が聞こえた。

「おい、ちよつとこゝを開けて呉れ。ちよつと訊きたい用事があるんだ。」

大川はこの聲を聴くと、直ぐにそれがお鳥のことのやうに直覺されて、急いで土間に降りて行つて、表の硝子戸を開けた。

「あなたは一體どなたなんで……。」

これはお鳥から聴いた「鐵の爪」の何とかといふ男ではないかといふ疑ひもあつたので、彼は先づかういつて注意深く訊ねた。

「あゝ、如何も失敬……。えゝ、僕は象瀉署の刑事のかういふもんなんですがね、實はちよつとお訊ねしたいことがあつてやつて來たんですが……。あなたはこちらの御主人ですか。」

さういつてその男の出した名刺には「象瀉署刑事北島武雄」といふ名前が記されてゐた。

「いゝえ、私は主人ではありませんが……。」

「さうですか。それぢや何卒御主人に御目に懸かせて下さい。」

いよ／＼お鳥が捕つたのだと思ふて、大川は何だか他人事ではないやうな氣がして、

「えゝ、それぢやあ今直ぐ喚んで來ますよ、何卒こちらにお入り下さい。」

といひ棄てたまゝ、急いで二階に寝てゐる能島を起すために、危つかしい階子段を上が

つて往つた。

刑事の訊きに來たことは、果して大川の思つてゐた通り、お鳥に金を盗まればしまいかといふことだつた。能島が降りて來て刑事に會ふと、刑事は彼の女が百圓紙幣を撒き散らしてゐるので、それから嫌疑を懸けたことや、彼の女の自白に依るとこゝで千圓盗んだといふが、併し盗難届が出てゐないことや、こんなことを警察官らしい冷やかな口調で話してから、改ためて訊問するやうな態度で、この事實の有無を訊いた。

「兎に角千圓といへばかなり大金ですから盗難にでも會はれたなら、直ぐに届け出られなければならぬと思つてゐるのですが……。それともまた何か事情があつて……。」

「いや、事情も何もありません。さういふ金を盗まれたといふ覺えは全然ないのです。」

さうきつぱり答へる能島の顔を、刑事はぢろりと探るやうな目付で見ながら、

「さういふ事實がないとすると、あの女が嘘をいつてゐるといふことになりますから、ま

たよく調べて見なければなりません……。」

といつたが、急に思ひ付いたやうに、

「如何でせう。甚だ御足勞ですが、ちよつと署まで來ては頂けないでせうか。」

「え、それは何つてもかま關ひませんが……。」

能島がさういふと、さつきから黙つて二人の話を聽いてゐた大川が、いくらか興奮してゐるやうな調子で云つた。

「先生。往つていらつしやい。そしてあの可愛さうな女を救つていらつしやい。」

かうして能島はこの朝、刑事と一緒に象潟署へ出懸けて往つたのだつた……。

能島が出懸けて行つてしまふと、大川は何だか唯一人取り残されたやうな淋しさを感じて、例のトルストイの寫眞の下の机の前の椅子に腰を懸けて、多少苛々いどくした心持で、警察に捕へられてゐるといふ女のことなどを考へてゐるが、そのうち不圖目を土間の上に落とすと、そこに一通の手紙が抛り込まれてゐるのが目に留まつた。

「何だらう。」

と思つて取り上げて見ると、それは今^{けさ}でも配達夫が硝子戸の隙間から投げ込んで行つた手紙と見えて、表には「大川真吉様」と彼の名前が記されてあつた。裏を返して差出人のところを見ると、これはまだ九州にゐて工場で働いてゐる時分、文學好きで、新しい思想などの研究もしてゐるところから、よく一緒になつて労働問題を談じたり何かしたことのある、平野といふ友達からの手紙だつた。

封を披^{ひら}いて見ると、中にはかなり激昂したやうな調子で、こんなことが書いてあつた。

「大川君。

僕は君が東京に去つてから、毎日淋しい時ばかり送つてゐる。唯一人の論敵を失つてし

まつた僕は、實に寂しい。仕方がないからその寂しさを紛らすために、僕は近頃では殆んど寸蔭も措しむ位にして、手當り次第にいろんな本を讀んでゐる。

僕には君のやうな創作の才能はないが、しかし僕は君の持つてゐない——といふよりもむしろ君の卑しんでゐる實行の才能があるといふことを信じてゐる。そして僕は唯一の論敵だつた君を失ひ、讀書に没頭するやうになつてから、沈黙をしてゐなければならぬだけ、いよいよ實行慾に胸が燃える。僕が沈黙を守つてゐられなくなる時は何時か。僕は唯々この時が待ち遠しい。

しかし人間てえものは妙なものだね。あれほど實行を卑しんでゐた君が、僕よりも先きに東京へ飛び出して往つて、無抵抗主義の宣傳を始め、それに引きかへて實行以外何もものないと思つてゐる僕が、毎日あの威嚇するやうな工場の汽笛を聞きながら、黙々として脂臭い機械の中に埋もれてゐる。

しかし、大川君。僕が沈黙を破らなければならない時は、もう近いといふことを信じて

るよ。近い、近い、確かに近い。ダイナモの唸るやうな人類の叫びが、何處からともなく聴こえて来るぢやないか。

大川君。無抵抗主義を奉ずる君に、こんなことをいつても無駄かも知れないが、要するに人生は戦ひだよ。男女の戦ひに、貧富の戦ひ、引つくるめていへば、神と悪魔との戦ひだよ。無抵抗主義なんてものは、要するに勝利者や強者の叫びではない。人生の戦ひに傷ついた者が、遁け込むために設けられた病院のやうなものだ。君はその病院の看護卒を以て甘んじてゐることが出来るのかね。

戦場に出たまへ、人生の戦場へ。君は戦士にして立派な人間ぢやないか。僕達は君のやうな勇敢な戦士の一人でも多いことを願つてゐるのだ。ダイナモの唸るやうな人類の叫びを聴いて、君だつて黙つてゐられるやうな人間ぢやあるまい。君が東京に去る前に二人で涙を浮べて語り明かした夜もあつたぢやないか。

兎に角僕は君がこんな病院のやうな仕事をしてゐないで、勇ましく人生の戦場に出るこ

とを望んでゐる。

何だか手紙を書いてゐるうちに、ひどく君が懐かしくなつた。聲を上げて泣きたいやうな妙な氣持だ。もうこれで止さう。」

手紙はここで終つてゐるが、大川はそれを讀み終つてからも、何時までも何時までもその面から目を離さなかつた。

彼の目からはだんだん手紙の文字が消えて往つて、そこには彼の友達の色黒い還ましい顔が幻のやうに現はれて來た。熱のあるその目、荒削りのその頬、力強く結んだその口——これは何時だか何かの雑誌の口繪で見た、ロダンの彫像のやうに雄々しかつた。まだ二十三四にしかならない青年だけれども、妙にその考へてゐることには老成してゐるところがあつて、九州にゐる時分の彼には、唯一人の親しい友達だつた。彼はその目に幻のやうに現はれて來た友達の顔を、じつと凝視めながら、二人で目に涙を浮べて語り明かした夜のことなどを想ひ起こしてゐるがそのうち臉の裏がだんだん熱くなつて來たかと思ふと、

燃えるやうな涙がほたほたその手紙の上に落ちた……。

四

大川の心は、この手紙のために、かなり力強く動かさた。

彼は小倉で能島の「愛の福音」と云ふ講演を聴いて、それに感激して能島の後を追つて東京へ奔つたのだが、しかし實際かうして一緒に仕事を始めて見ると、能島の奉じてゐる無抵抗主義が、彼のやうな年の若い、多少狂熱的な男には、何となく生温いやうな気がしてもの足りなかつた。「敵を愛せよ」とか「悪に抗する勿れ」とかいふ言葉は、演壇の上に立つた能島の口から吐き出された時には、力のある火のやうな言葉のやうに聴こえたけれども、それを實行に移して見ると、それは何となく弱々しい、腑甲斐のないものやうにしか思はれなかつた。さう云ふ譯で彼が能島の今度の仕事を、いくらかもしかしく思つてゐるところだつたから、この手紙には可なり力強く動かされないのであるなかつたのである。

る。

「人生の戦場へ……病院の看護卒……人間の叫び……ダイナモの唸り……」

こんな言葉がきれぎれに彼の頭の中を通り過ぎて往つた。黙つて涙の流れるに任せて、ちつと唇を噛みながら、いろいろのことを考へてゐると、彼の頭の中は幾度か明るくなつたり暗くなつたりした。

「戦争か、平和か。」

彼はだんだんいろいろのことを考へてゐるうちに、何時の間にかこの二つの言葉を繰り返すやうになつてゐたが、しかし何時まで経つても、彼の心はどつちを選むとも決まらなかつた。

「手紙にも聲を上げて泣きたいと書いてあつたが、おれもやつぱり聲を上げて泣きたい。」

彼はかう心の中で叫ぶと同時に、事實机の上に體を投げ出すやうにして、片手に手紙を握んだまま、片手で頭の毛を掻きむしりながら、おいおい聲を立てて泣きはじめた……。

幾時間泣いたらう。大川は夢中になつて、むしろ涙に濡れてゐるやうな心持になつて、かなり長い間泣き續けてゐるが、そのうち彼の耳の傍で、

「おい、如何したんだ。」

といふ聲が聴こえたので、やつとわれに返つたやうに涙を収めて、泣き濡れてゐる顔を上げた。

と、そこには何時歸つて來たのか、能島がびつくりしたやうな顔付で突つ立つてゐた。

「如何したんだ、君。」

さう訊かれると大川は、わざと笑ひに紛しながら、

「いいえ、何でもありません。それで如何しました、あの女は。」

と訊き返してから、手に持つてゐた手紙を懐ふところに收しまつた。

「うん、無罪放免さ。一緒にここに伴れて來やうと思つたんだが、極りが悪いつていつて如何しても來ないんだ。」

大川は無論能島と一緒に伴れて來るものと思つてゐたので、多少詰なるやうな調子になつて、

「それであなたは如何したんです。見す見すあの女が、あの罪の巢のやうなところへ戻つてゆくのを、あなたは黙つて見てゐたんですか。」

「うん、黙つて見てゐたつて譯ぢやあないがね、當人が來ないと云ふものを伴れて來る譯には往かないぢやないか。」

「いや、駄目です、駄目です、當人が來ないつていつたつて、無理に伴れて來なければ、折角救つた甲斐がないぢやありませんか。あんなところへ戻してやつたら見す見す罪を犯しにやるやうなもんです。」

能島は大川が何時になく激昂した調子なので、少し呆氣に取られたやうな様子で、

「しかし、君。さうは往かんよ。僕の女房だとか姉妹きょうだいだとかいふなら別だが……。」

「そんなことで可哀さうな人達が救はれるものですか。それにあの女はうっかりしてゐる

曉

と、鐵の爪の何とかいふ悪いやつに殺されるといつてゐたぢやありませんか。よろしい。先生。あなたが如何しても伴れて來ないならば、僕がこれから往つて伴れて來ます。そして僕は僕の手であの女を救つてやります。」

鐘

大川はさう叫ぶやうに云つたかと思ふと、突然椅子から立ち上がつて、荒々しく表の硝子戸を押し開けるなり、狂ほしく外へ飛び出して往つた。

お鳥の行方

一

大川がほんやり疲れ切つたやうな顔付をして歸つて來たのは、それから三四時間も経つてからのことだつた。

彼は歸つて來るなり突然、例のトルストイの寫眞の下の机に對して、何か書き物をしてゐた能島に向つて、ひどく突慥貪つぐげんどんに怒つたやうな調子で云つた。

「先生。駄目ぢやありませんか。いくら探したつて見付かりやあしません。」

さう云ふ彼の顔の上には、血走つた目にも、喰ひしばつた口元にも、云つてゐる言葉以上露骨に、心の中の焦燥と不愉快とが現はれてゐた……。

迷へる人々

「さうか。見付からなかつたのか。」

能島は歸つて來た大川の顔を一目見るなり、直ぐに彼が不機嫌であると云ふことが分つたので少し氣の毒さうにかう云つたが、しかし彼はまだ大川がお鳥のこととなると、何故かう情熱的になるか分らなかつたが、さつき聲を上げて泣いてゐたことや、狂ほしく外へ飛び出して往つたことや、そんなことを考へると、彼も大川の心の中に、人に云へないやうな惱みがあるのを、感じないではゐられなかつた。

「さうか。見付からなかつたのか。」

能島はもう一度歎息するやうに同じ言葉を繰り返して云つてから、

「全く僕が悪かつたよ。一緒に伴れて來りやあ好かつたのだ。」

「ええ、さうですとも……。伴れて來ないなんてことがあるものですか。それぢやあ全くほんとに救つてやつたと云ふことにはなりませんからね。」

「うん……。能島は黙つてぢつと考へてゐた。」

「若しかしたら大川はお鳥を戀してゐるのではあるまいか。」

さう云ふ考へが始めて彼の頭の中を、閃くやうに通つて過ぎた……。

「先生。ほんとに如何して伴れて來なかつたのです。あれでまた元のおんなところに歸つて御覽なさい。到底永久に救ふことは出来ませぬ。あすは全く罪惡の巢のやうなところですからね。今日もあれから一軒々々訊いて歩いたのですが……何と云つていいかさうやつて訊いて歩いただけでも堪りませんでしたよ。」

「さうか。一軒々々訊いて歩いたのかい。」

「何しろ所も何にも知らないのですから、さうするより外仕方がなかつたのです。」

大川はさう云つてからがっかりしたやうに首を振つて、

「しかし駄目でした。何處で訊いても、さう云ふ女は家にはゐないと云ふ返事なのです。もつともゐたにしようが、へんな青い色の職工服の男が訪ねて往つたんでは、ゐないと云ふかも知れませんが……。まあ、兎に角今日のところは無駄骨折でしたよ。」

「しかしこつちがさう探し廻らなくつても、そのうちあつちから訪ねて来るかも知れないぜ。」

能島がさう云ふと大川は、強くその言葉を否定するやうに頭を振つた。

「いゝえ。来るものですか。あの女は見たところするぶん阿婆摺れのひどい女のやうに見えますが、しかしほんとはかなり清い心を持つた女なんです。それは私にはよおく分つてゐます。それだから無論自分の罪を耻ぢて、とてもここへやつて来るやうな、そんな厚顔あつみかましいなことが出来るものですか。」

さう云つてから燃えるやうな眼差で能島の顔を視詰めながら、

「しかし、私は如何してもあの女を探して来ますよ。さうして私はあの可哀さうな女が、新しい幸福の生活を始められるやうにしてやるつもりです。」

能島はこの言葉を聴くと、「慥かに大川はお鳥に戀してゐる」と思つてちよつと微笑した。いやうな心持になつたが、しかし大川の調子がひどく熱烈で眞面目なので、それはまだ頬

に上らないうちに消えた。

「うん、僕が伴れて来なかつたのが悪かつたのだから、僕もせいぜい探すことに骨を折らう。」

能島はさう云つてから、何だか黙つてゐられないやうな心持になつて、

「ねえ、君、君はあの女に戀してゐるんぢやあないのかい。」

「ええ、あの女に……」

大川はさう云ひ懸けたなり、見る見る顔を眞つ赤にして、ぢつと土間の上に瞳を落した。

と、能島は今度はひどく嚴肅な調子で云つた。

「若し戀してゐるなら夫婦になりたまへ、それがあの女を幸福にする唯一の方法だよ。」

大川は何とも返事をしず、掌てのひらで洋袴ズボンの膝あたりをこすりながらもじもじしてゐた……。

大川はそれから毎日のやうに、ピラを配りに往くとか何とかいつては、お鳥の行方を探しに出懸けた。彼の頭には今はもうトルストイも、無抵抗主義も、鳩の家も何もなかつた。彼は全く情痴の奴になつてしまつたといつてもいい位、お鳥の行方を探すのに没頭してゐた。そしてそんなことをしてゐるうちに、何時の間にか半月ばかり経つてしまつた。

小倉の友達——彼に勇ましく人生の戦場に出ろといつて手紙で勧めて來た平野といふ友達からは、それつきり何ともいつて來なかつたが、しかしだんだん能島の仕事——無抵抗主義の宣傳などといふ生温い仕事から興味が失つて來るにつれて、この手紙に書いてあつた文句が、力強く彼の心を誘惑した。彼は思ひ切つて能島に向つて、

「先生。もうこんな仕事は止めにして、ひとつ何か積極的な運動をやらうぢやありませんか。」

などといつて勧めることもあつたが、能島はいつも慰撫めるやうに、

「まあ、もう少し辛抱して呉れたまへ。」

といふだけだつた。かうして彼は戀の上でも、仕事の上でも、毎日悶々の状に堪へられないやうな日ばかり送つてゐた……

と、丁度それから半月ばかり経つた或る日の夕方のことだつた。大川はまたいつもの通り何處かでお鳥に會ひはしまいかといふやうな、微かな希望を抱きながら、千束町の通りを淺草公園の方へ歩いてゐた。どんよりと空の薄濁りのした、霧雨でも降り出しさうな鬱陶しい日で、今點いたばかりの灯にも、冬らしい冷々とした色が見られた。

彼は俯向き加減にも思ひに耽りながら、千束町の通りを公園の瓢箪池に突き當つて、それから池に附いて活動寫真館の並んでゐる前を歩いて往つたが、冬の夕方だとはいへそこら邊は、イルミネーションの灯明りで晝のやうに明るく、織るやうな人影に賑はつてゐた。彼はここに來ると、さすがに胸の中までが明るくなつたやうな氣がして、活動寫真の

毒々しいやうな彩旗や看板などを見ながら歩いて往つた……。

と、もう池が盡きてしまはうとするところの交番の傍まで来た時だつた。彼は不圖誰か向ふから来て突き當つたかと思ふと、自分でそこに轉んだまま起き上がりもせずに、

「痛えなあ。叔父さん。痛えぢやねえか。」

といふのを訊いた。氣が付いて見ると、その地面の上には、一人の子供が横倒しに倒れたまま、わざとらしく聲を立てて呻いてゐた。

「おお、如何した、怪我でもしたのか。」

何處か見覚えのある子供だと思ひながら、扶け起さうとして肩に手を懸けながら聲を懸けると、その子供は彼の手を振り拂ふやうにして、

「おお、痛え。觸つちやあ痛えよ。突き當つて置いて怪我したかもねえぢやねえか。こんなに摺り剥いちまつたぜ。ねえ、叔父さん。膏藥代をお呉れよ。」

「なに……膏藥代……。」

子供の癖に強請かけやがるなと思ふと、何だか腹が立つて、むかむかしながら訊き直した。

「ああ、膏藥代よ。何しろおらあ貧乏人の子だ。膏藥だつて買へやあしねえ。」

「勝手にしやがれ。誰が手前のやうな奴に膏藥代なんか取られて堪るものか。」

「ひでえぢやねえか。おお、痛え。人にこんなに怪我をさして置いて……。おまけにおらあ不具なんだぜ。」

「なに……不具……。」

さういはれてよく見ると、それは十歳ばかりになる佝僂の子で、何時だか優梨子の托した千圓の金を届けに来た子供に違ひなかつた。その佝僂の子は事實大川が思つた通り、その時の子供だつたが、彼はまだそれがお鳥の弟の新吉だといふことは知らなかつた。

「おや、お前は何だな。この間自動車に乗つた女の人から頼まれたといつて、手紙を届けて来たあの子供だな。」